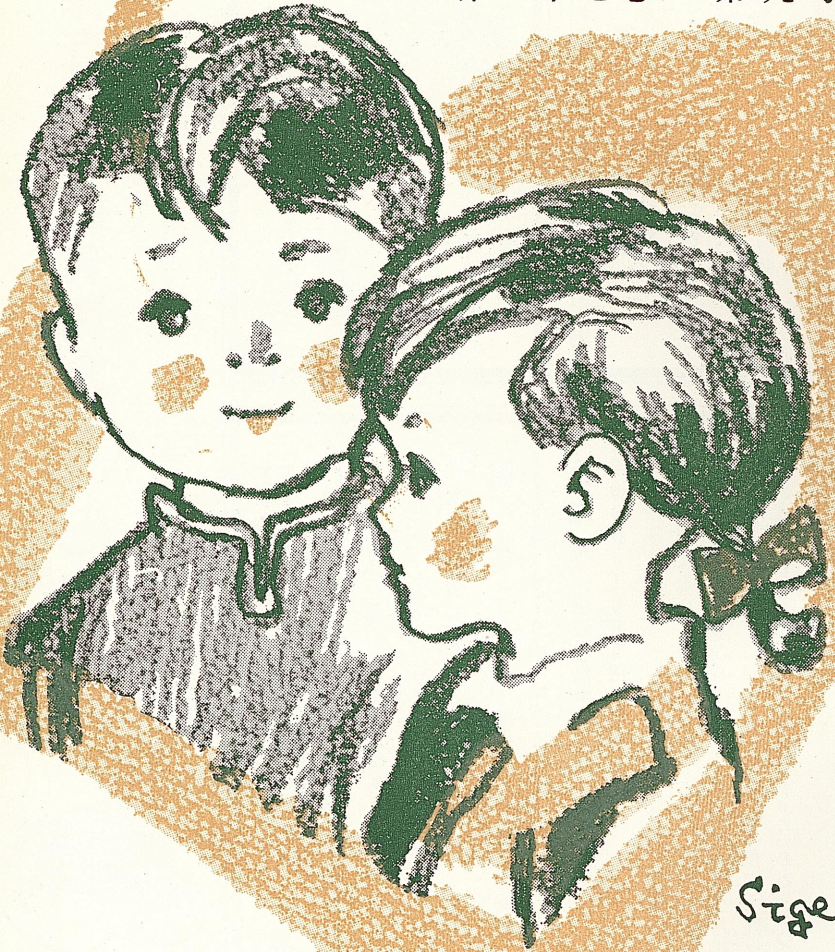


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十七卷 第九号



Sige

9

日本幼稚園協会

フレールベル館保育図書新刊紹介

保育学年報 (1967年版)

日本保育学会編 B5判 256頁
2300円 〒90円

保育および保育学に関するその年度の動きをもしなく集録。学会における研究発表・遊具・絵本などの幼児文化財・保育関係図書目録・保育行政の動きなど価値ある資料を満載。特集は「保育所保育指針の実践的批判」

保育効果の研究

村山貞雄著 A5判392頁 上製本・ケース付
1000円 〒90円

保育の実践はいかなる効果があるだろうか？保育効果の問題をライフ・ワークとする筆者が、長年試みた歴史的接近法・質問紙法・観察法・内省法・実験法等の調査を集大成する保育者必読の書。

日本幼児保育史 (全三巻)

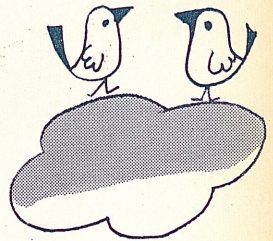
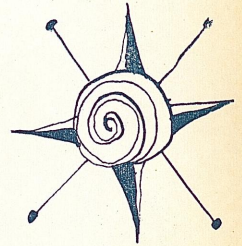
日本保育学会著 A5判 上製本・ケース付
日本保育学会の共同研究委員会が、十数年を費やして、全国的に集めた資料をもとに完成した日本で最初の保育史です。

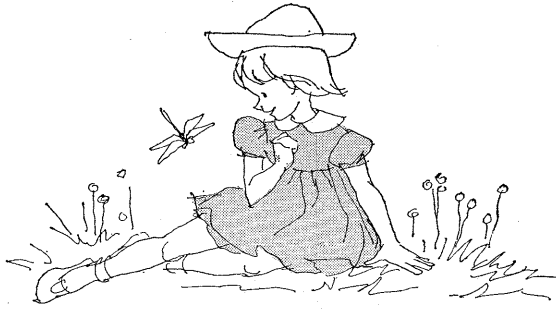
第一巻 (江戸時代～明治時代初期) 総賛発売中
256頁 900円 〒90円

第二巻 (明治時代中期～末期) 発売中
304頁 1000円 〒90円

明治後期は、その前期にみられた外国の模倣を、無批判に受け入れることから一歩すすんで、実際の経験や、国家主義的な考え方から保育方法に反省が行なわれた重要な時期であった。これを保育思想・幼稚園・託児所・保育制度・教員養成施設・保育会などにわたって展望している。

第三巻 (大正時代～現代) 11月刊行予定





幼児の教育 目次

——第六十七卷 九月号——

表紙 小坂しげる

世界最初の幼稚園の創設者

フリードリッヒ・フレーベルの現代的意義…………… 莊 司 雅 子 (2)

二期期の抱負とその展開…………… 清 水 エ ミ 子 (14)

二期期の抱負とその展開

集団のなかでのひとりひとりを大切にして…………… 岡 田 鈴 代 (19)

保育界の忘れられない人

倉橋惣三先生…………… 上 澤 謙 二 (26)

幼児教育と発達心理学

藤 永 保 (28)

幼児のあそび…………… 大 戸 美 也 子 (43)

幼児の環境と遊びについて…………… 寛 田 知 義 (50)

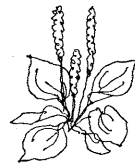
並 瀧 信 子 (50)

愛珠・想い出するままに(六)…………… 中 村 道 子 (60)

洋 書 紹 介…………… (70)

世界最初の幼稚園の創設者

フリードリッヒ・フレーベルの現代的意義



莊 司 雅 子

1 幼児尊重の教育

フリードリッヒ・フレーベルは今から百数十年前の一七八二年にドイツのカイルハウに生まれた人であった。そして一八四〇年にドイツの有名なチューリンゲンの森の片田舎、ブランケンブルクというところに、世界最初の幼稚園（キンデルガルテン）を創った。だからフレーベルといえば幼稚園、幼稚園といえばフレーベル、また幼児教育といえばフレーベル、フレーベルといえば幼児教育の父であるというように、フレーベルと幼稚園と幼児教育とは一体に考えられているほどである。ではなぜフレーベルと幼児教育とはこのように密接な関係にあるのであろうか。

フレーベルは世界中のだれよりも幼児を知り幼児を尊重し、幼児に生き、幼児を幼児として生きぬかした人であった。幼稚園という名称をつけたのは一八四〇年であるが、幼児教育の仕事をはじめたのは一八三七年であった。しかしその前年の一八三六年にフレーベルは『生活の革新』という論文を出し、そのなかで「いざや、われらが子らに生きよう！」（Kommt, Lasst uns unsern Kindern Leben!）という標語を掲げて、世の人びとに幼児教育の重要性をうったえた。それから自らその仕事に出発したのであった。かれの幼児教育はまったく幼児尊重の心から、幼児のうちに秘められている絶対的なもの（フレーベルはこれを神性とよんでいる）に対する敬の精神から発したものである。

2 自己活動の教育

フレーベルによれば子どもの活動はすべて創造的なものである。しかもその創造的活動は、同時に自己のうちに秘められた神的なものの自己表現である。だから教育の課題は子どもがこのような自己表現を助ける以外のもではない。『人間教育』の基礎論でフレーベルが「教育も教授も本来その第一原理においては、必然的に受動的な追従的なただ保護的な防禦的なもので、決して命令的な断定的な干渉的なものであってはならない」と述べているのも、教育上自己活動を重んじなければならぬことを意味している。

フレーベルはつづけていっている。「われわれが植物や動物に空間と時間とをあたえるのは、かくすることによって初めて、これらの内的生命が美しく成長し発展することを知っているからである。またわれわれが植物や動物に休息をあたえるだけではなく、かれらに対する強制や干渉をとり除くのも、ひとえにかれらを眞の自己発展と健全な自己成長をねがうからである。

しかるになぜに若き人の子のみは、大人にとって欲するままに鑄型に入れうる蠟の一片、粘土の一塊でなければならぬか。もしわれわれが花園や畑や牧場や森を逍遙して、沈黙のなかに自

然がわれわれに教うるものを静かに聴くならば、そこにかれら植物が如何によく内的合法性を現わしているかを看取することができるであろう。だからはやくから本性に反して形式や規則を強いられ、そのために虚弱な不自然な姿をしているような子どもが、はたして立派に成長し円満に発達することができるであろうか」

このように考えてフレーベルはただただ神性なる人間の本性にしたがって、あらゆる命令的な干渉的な強制的な教育を否定し、禁止する。しかしかれがまた、生徒をよくみて、もし本来の純な姿が傷つけられているという証明が確かにできた場合には、もちろん厳格な命令的な教育法が採用されなければならないといっているのも、われわれは耳を傾けなくてはならない。

このことは今日、新教育の原理としてわれわれが子ども自発性を重んずべきことを強調している点である。教師が一方的におしつける教育は子どものためにはあまり役にたたない。子どもが自ら進んで学ぶものにして、はじめて子ども自身のものとなるのである。どうすれば子どもが自ら学習するかをくふうすることこそ教師の仕事である。

3 労作を重んずる教育

人間が生きているということは、フレーベルにしたがえば働く

ことであり、活動することであり、仕事をするものである。人間の使命とは自らのうちにある神性を、行為を通して表現することであり、また表現することによって神のように行動することである。人間は本来すでにこのように表現し、表出し、行動し、活動しそして創造するものである。しかも人間はこのことをみずから知って行なうものである。フレーベルの労作とは、だから人間が自覚的に自己の内的生命を形成し、表現していくことである。

人間が自己の内的本質を、行為を通して表現したり、具体的な行動に移したり、形あるものにしたたりすることが、フレーベルの労作の意味である。それは生きることそのことであり、活動そのものであり、仕事そのものであり、労働そのものであって、なんらかの目的のための手段ではなくて、目的そのものである。人間の活動を商品としてみたり、賃金をえるための手段であると考えたりするのではない。

フレーベルによると労働は神聖である。したがって人間の働きに上下貴賤の別があるはずはない。人間のすべての活動はそれ自身尊いもので、ひとしく価値あるものであり、すべて尊重されなければならない。

かくてフレーベルは教育上子どもの活動を重んじ、すべてを行動に訴えることに重きを置いた。かれは子どもをしてます

行動させ、そしてそれによって子どもが自己の行動から何を学びえたかを自ら求めさせ、それによって自己がなしようものを自ら発見させ、さらには自己自身について知らせようとした。

かれが『人間教育』のなかに教授の根本原理として述べている次の言葉がこのことを語っている。「あることをなせ。そしてその行為からいかなる結果が生じ、その行為がいかなる知識をあなたにあたえるかをみよ」これはすべてを行動を通して学ばせるべきであることを意味している。特に幼児の場合フレーベルが遊戯や仕事を重んじたのもここからきている。

4 遊戯と作業を重んずる教育

フレーベルは幼稚園を創設する十数年前から、幼児教育の根本は何よりもまず幼児を遊ばせながら導くこと、遊戯を指導すること、また幼児を楽しませながら同時に力を発展させることに努力しなければならぬと確信した。だから幼児の生命を保育する道は、主として遊戯であるといっている。

そこでフレーベルはまず遊戯理論の確立と遊具の創作に全力をそそいだ。フレーベルは遊戯と作業の教育的意義を強調した世界教育史上の第一人者である。「遊ぶこと、つまり遊戯はこの期における人間の発達、すなわち児童生活の最高の段階である」

なぜかといえ、遊戯 (Spiel) というドイツ語はフレイベルによればすでにその言葉が示すように、児童が自己の内界をみずから自由に表現したもの、自己の内的本質の必要と要求とに応じて内界を外界に表現したものであるからである。遊戯はこの期の児童の最も純粹な精神的なあらわれであり、同時にまた人間生活全体の模範ともいふべきものである。遊戯はそれ自身喜びであり、自由であり、満足であり、平静であり、また外界との平和であるが、さらにみる人にも、これらの感じをあたえるものである。

「遊戯はまたすべての善なるものでてくる源泉であるから、身体の疲れるまで、倦まずに落ちついて遊ぶ児童は、成長ののちには必ずや犠牲的に他人の安寧や幸福をはかり、ひいてはわが身の幸福をも増進するような、落ちついて根気強い有為の人間になるであろう。児童が熱心に遊びに没頭し、十分遊んでは疲れて、よく眠っているようすは、この時期の児童生活の最も美しい現象ではないであろうか」

このように遊戯はフレイベルにとって実に高い意義と価値とをもっている。かれによれば児童の随意の遊戯といえども、われわれはそのなかに将来の内的生活の芽生えを認めることができるという。児童のいかなる遊戯も、全生涯のいわば双葉である。というのは遊戯のなかに人間の最も純粹な素質や最も内なる精神が発

揮され顯示されるからである。

児童の遊戯や作業の大きな教育的意義を見出したフレイベルが、教育の実践にあたって如何に児童の自然の遊びを重んじたかは次のフレイベルの学園描写の一端からうかがうことができる。

フレイベルは世の親たちや教育者に向かって彼の教場に參觀にくるようすすめている。そしていっている。

「いろいろな利用されているこの部屋には大きな卓があるが、その上には積木の木材が入っている箱がある。その他、砂や鋸屑などもこの部屋にある。また美しい松林を散歩した際に持って帰ったきれいな緑の苔もおいてある。今は自由の時間である。子どもは各自思い思いに自己の仕事をはじめ。そこには机の隅の隠れたようなところに、小さな教会堂ができた。

この会堂は落着いた小さい子どもの創作である。——彼方にはまた、二人の子どもが共同して、椅子の上はかなり大きな建物を建て始めた。それは数層の高楼で、一つの城を造り上げようとしたものである。この城はちょうど山の上から谷を見下ろすような具合に、椅子の上に高く聳えている。——向こうの方では卓子の下にこっそり何か造っている。それは緑の丘で、上には崩れかかった城が立っている。——また他の二、三人の子どもの手で、彼方の平らなところの一つの村が展開されている。——さてみんな

の仕事は終わった。子どもたちは自分の造ったものや他の子どもたちがそれぞれひとりりで造ったもの、また共同で造ったものなどを眺めている。

すると彼らの頭の中に新しい考えや願いが起こってくる。というのは別々に造ったそれらの結果を一つの全体にまとめてみたいというのである。その考えが誰もの願うところであるということがわかると、直ちに共同の仕事が始まる。先ず村から古い城へ、古い城から高い城へ、高い城から教会堂へと一筋の大道が造られ、その間に牧場や小川ができる。

別の時にまたこの教場へ来て見ると次のような場面が見られる。二、三人の子どもは粘土で山水の景色を造った。他の一人は厚紙で家造って、それに窓や戸口をつけた。またある子どもは彼方で胡桃の殻で小舟を造った。各自それぞれ自分の造ったものを眺めて満足する。しかしそれだけで孤立しては、何となく物足りなさを感じる。ふと隣りの子どもの作品と自分のと連結させたらさぞかしおもしろかろうと考える。やがて相談がまとまり、直ちに家は小高い丘の上に移されて、城のように立つ。小舟は小さな湖水の面に浮ぶ。そこへ一番小さい子どもが小さな牧者と羊とを持ってきて、丘の上と湖との間へおいた。

一同非常におもしろ味を感じた。そこで一同は手を休めて、た

たずみながら、自分たちの手になった作品に眺めいって喜びと快感を感じるのである。眼を転ずると下の小川のほとりで何か大騒ぎが聞こえる。見るとやや年長の少年たちが運河をひらくやら、水門をつけるやら、橋を架けるやら、港を設けるやら、また堤防を築くやら、水車を設けるやら、で、それぞれ自己の仕事に没頭して他を顧みないともない位である。

しかし今、水を流さねばならない。それは当然高い処から低い処へ流れるから、それを利用して舟を高い処から低い処へ送らねばならない。ところが水が流れ、舟が下るに従って隣りの子どもの境界を侵すことになる。各自は所有者・創作者として相互に自己の権利を認めている。友だちの要求にも無理のないところがあがるが、しかし自己の権利も主張せざるを得ない。この問題はいかに調停されるか。——他に方法はない。ただ条約によるだけである。国家と国家との関係のように、彼らは互いに堅い条約を結ぶのである。

子どもたちのこのような遊びのうちに、いかに多くの意義があり、またそれからいかに多くの収穫が得られるか、それを各方面にわたって十分明らかに示し得ることは困難であろう。しかも次の二つのことだけは確実であり、真実である。

第一はこのような遊びは、幼年期における子どもたちの同一の

心意や同一の精神から出たものであること、第二は、右の遊びをした子どもたちは総べてよい子であったこと、彼らは記憶力もよく、理解も早く、思慮深くしかも実行的であり、勤勉家であり努力家である。言い換えれば、頭脳の点において、心の働きにおいて、有為にして、よく論じよく行なう子どもたちであること、そしてかような遊びをするような子どもは、将来注意深い聡明な有為な人間となるであろうということなどである」

5 個性と社会性を重んずる教育

フレーベルは個人・家庭・社会・民族・人類の関係を「部分的全体」という言葉で説明している。「部分的全体」とは個体はそれ自身としてみれば一個の全体であるが、それは一段高い全体の一部分であるということである。だからわれわれは全体の一部分であり、人類の「部分的全体」が人間である。そしてこの限りにおいて人間は人間になり、また全体的人間になる。人間はまた全体の成員であるが、同時に全体であり部分である。

だから各人は子どもの時、すでに人類の必然の本質的成員として理解され、認められ、そしてはぐくまなければならない。フレーベルは新たに生まれた子どもを単にその家族の一員としてみるだけではなくて、もっと広く全民族、いな、全人類の一員とし

てみなければならないといっている。したがって児童の成長発展は直接人類の成長発展に関係するという。われわれは常に人類発展の現在・過去・未来の必然的結合において、児童を観察し取扱わなければならない。

フレーベルは次のように述べている。「子どもの教育は人類の発展に対する現在・過去および未来の要求と結合し、調和し、一致しなければならぬ。神的素質と自然的素質と人間の素質とを有する人間は、神と自然と人間とに関係し、統一性と個性性と多様性とを自己のなかに含み、それ故に同時にまた現在・過去および未来をみずからのなかに秘めているものとして観察され、注意され、そして取り扱われなければならない」

フレーベルによると「家族の一員としての児童の行路が家族の本質、すなわち家族の精神的の素質と力とを調和的に多方面的に、明瞭に発展し表現するにあると同様に、民族の一員としての人間の行路と使命とは、全人類の力と素質とを發展し、教化し、そして表現するにあるということにある」この考えはややもすれば個人は全体のために自己の立場を没却されるおそれがあると思われる。

ところがフレーベルによれば、個人あつての全体、全体あつての個人であるから、個性と社会性とは相互の否定的媒介において

のみ自己をあらわすことができる。だから「家族の成員が自己を最も完全に、最も明瞭に、最も多面的に、そして最も固有な方法で、最も個性的に發展し、表現する時は、すなわち両親および家族の本質を児童すなわち家族の成員が最も完全に表現していることになる」

フレーベルは有機的自然觀の立場に立つて個と全体との關係を考えているから、個々人はそれぞれの職場において、与えられた地位において、他との關連のものにもっとも個性的に表現することによって、初めて全体を完全に表現することができるという。フレーベルが教育上特に児童の遊戯や作業のもつ価値を高く評價したのもここからきている。いな恩物の創作もこの原理からきており、幼稚園の創設もこの精神からきているといつてよい。特に遊戯や作業のなかにフレーベルは幼児の個性と社会性を見出しそれを伸ばすことに努力していた。

6 新しい宗教教育

宗教教育に対してもフレーベルは進歩的な考えで行なっていた。彼にすれば宗教上のある格言はとかく一方に偏していいあらわされているために、却つて人間の生活にとつて本来あたえるべきでないような感化をあたえるものがある。たとえば宗教教育な

どで特にたいせつとされているが、しかし一般に人の生活や幸福、さらに不断の進取的努力の精神などにとつて甚だ妨害となるような格言、すなわち「善良なものはいはあわせである」とか「善良なるものは報いがある」とかいうような格言がこれである。まだ經驗に乏しくいわば自己中心的な単純な子どもにとっては、内的の善と外的の善、内的の幸福と外的の幸福、内的の生命と外的の生命とはまだ分たれてはいない。

それであるからこのような格言は子どもだけではなくて、一般に人間の内部的な平和と力とをはやくから妨害したり弱めたりすることはないとしても、少なくとも人に人生に対して全く誤った期待をもたせたり、自分の生活上のできごとについて全く誤った判断を下したり、全く誤った解釈や応用をするようにさせたり、ついには人生に全く失錯させるような結果をもたらせたりするにちがいない。

フレーベルの宗教教育はこのようなものではなくて、もっと積極的なものを要求している。そしてむしろ次のような原則を立てて、これを子どもやおとなに經驗的に証明させるべきであるといふ。その原則というのは「およそ眞に誠実と努力と犠牲的精神とをもって善を求めるとは、必ず外部の圧迫や外部の苦痛や窮乏、外部の心配や困難、外部の欠陥や災難や欠乏に遭遇するであ

ろうし、そしてこれと戦って生きなければならぬものである」
フレーベルはこの世で報いられない善良な業績や行為は来世において必ず報いられるというようなことが、宗教上の教訓や教授においてしばしばとり立てて唱えられているが、このような教訓は有害であつて、こんな教訓を授けるぐらいなら、むしろ宗教教訓のないほうがまだましであるという。

またこんな教訓は人間に生来あたえられてある目的を達成する上に最大の妨害となるものである。こんな教訓は肉欲的快樂をもつて最上の幸福と考えているような無教養な劣等な人間には、何の効果もないし、また生来善良な心をもつた子どもやおとなにとつては、このような教訓の必要を感じないのである。なぜならばわれわれの生涯が純潔であり、われわれの行為が正善であり、そしてわれわれの業績が善良でさえあれば、何も来世の報酬を求め必要なないからである。

人間をしてその天性や天職や使命に恥かしからぬ行為をなさしめるためには、来世の報酬という刺激剤が加えられなければならないと考えるのは、人間の本性を知ることの浅薄と、その品位をみることの軽薄とを示すことである。

フレーベルによればもし人が幼年期から純粋な人間たるべく教育されたならば、かれはいかなる瞬間にも自分の品位と本性とを

感ずるように導かれることができるであろう。そして自分の品位や自分の本性にしたがつて忠実に生活し、活動してきたという感じや意識こそは、かれにとつていかなるときにもかれの行為に対する最高の報酬であつて、そのほかに何らの外部的な報酬も無用であり、ましてかかる外部的な報酬の要求されることもないのである。

たとえば純真な自然的な善良な行為をした子どもは、自分が立派な行為をしたということを自覚した喜び以外に、自分の行為に対して何かもつと報酬を考へるだろうか。たとえ称讃ということだけでも考へるであろうか。フレーベルの宗教教育の目標は、まさに人々をしてこのような内的喜びを自覚しうるようにさせることにある。この立場は功利的・打算的になりやすい現代人にとつて一服の清涼剤にならないであろうか。

7 体育論

身体は自分に一番近いものである。しかしそれだからといって、人は身体のことをよく知っているとさえない。ことに幼年においてそうである。フレーベルのいうようにたとえば四肢はわれわれの身体と一つになっているからといって、それでわれわれは直ちに自分は四肢を自由に使用しうるものと考えてはならない。

われわれは自分の力を知るだけではなくて、さらにその力を使用する手段をも知らなければならない。

ところでその手段をも知るようになるには身体の諸部分を調和的に発達させる必要がある。このように四肢や身体の発達をまっぴらからその使用を訓練することを、フレーベルがその時代にすでに強調していたということは全く卓見であるといえる。今日の最もすんだアメリカの心理学者とよばれている人たちは、最近しきりにこのことを説いている。すなわち子どもの側の用意ができてからでなくては、訓練しても無駄であるということである。

フレーベルは習字とか図画とか奏楽などを例にとつて説明している。すなわちもし生徒が幼年期から身体や手足が真に円満に発達し、その使用も平均してかたよらず、自由自在に四肢や身体を動かすことができるようになっているのでなかつたならば、いくらか機械的に教育しても訓練しても決してよい結果があらわれないという。だから学校で「常に正しく座れ」とか「腕を真直ぐに伸ばせ」とかいうようなことを、ただ繰返してはいいかにも生気のない教授に終るであらう。

幼年期から身体を各方面に平均に訓練しておけば、生活のあらゆる境遇にあつて、また職務上のあらゆる仕事に向かつて常に強

健な活発な身体を保ち、権威ある態度を持ち、身体の儀容を整えることができる。このように考えてフレーベルの体育論はきわめて現代的であるといふことができる。

8 自然観察

事物の知識は、事物そのものおかれて位置や周囲の事物と関係させることによつて最も明瞭に確實にえられるのである。それゆえに子どもたちが自然を研究する場合、もし事物がそのありのままの自然的関係においてみられ、自然のままの関係から認められるならば、必ず子どもたちは事物の本質も最も明瞭に洞察することができるであらう。

また子どもたちは事物や事物の種々なる働きが自分と最も近く、たえず自分を取巻いているのを見るならば、またそれらの事物の存在の理由が恐らく自分自身のなかにあり、少なくとも自分自身からいって、また自分自身へ関係しているような場合であれば、最も明瞭に確実に事物の関係や状態や事物の意義などを最もよく知るであらう。

たとえば、そのものが最も手近にあり、最も近き周囲にあるものであれば、すなわち自分の部屋、家屋、庭園、田畑、村落（または市街）、牧場、野原、森や林、平原などのなかにある事物で

あれば最もよくこれを知るであろう。このように最も手近な周囲から、すなわち部屋の事物の観察から出発して自然および外界の観察へと秩序を辿り、秩序を立ててすすんでいくことがたいせつである。それはより近きものやよく知られているものから、次第により遠きものやよく知られていないものへとおよんでいくことでもある。そしてこのように秩序づけたり、総括したりしたのちに、再び分析するように組織すれば、自然観察も立派な学校の教授題目となるのである。

フレーベルのこの教授法は今日新教育で強調している生活学習や体験学習とも一脈通ずるようである。フレーベルはさらに続けていっている。教師はすべからく生徒に動物をその棲息している場所に関係して観察させたり、植物もその場所に応じて観察させたり、屋内植物、温室植物、庭園植物、野生の植物、草地の植物、森林の植物、水生の植物、沼沢植物、寄生植物などに分類させたりするがよい。次には同様の視点から、土鉱類を説明したり、同様な方法で同様な視点からさまざまな自然現象、たとえば陸地や空気や水や火などの現象を説明するがよい。

右のようにまず自然観察をさせながら、次第に自然研究や自然記述へ、さらに博物学へと指導するならば、やがて子どもは、生活や生活との利害関係を通じて人間に最も交渉の深い動物の観察

に重点を置くであろう。要するにフレーベルの教授法に従えばすべての人間からいって人間へかえること、生徒の最も手近な環境からいって、結局もとのところへ立ち戻るといふ方法をとることがたいせつであるという。

9 数観念の発達

数の観念の発達はフレーベルによれば言葉や描画の発達にともなうものである。そしてそれはすでに幼児期の描画活動にあらわれている。幼児期における数の観念の発達と指導についてはフレーベルは『人間教育』の第一章の「幼児期における人」で少し述べており、さらに第四章の「生徒としての人」の「算術の練習」という項目で、学級内における算数教授法を述べている。

かれによれば学齢期までに子どもは遊びをとおして少なくとも十から十二ぐらいまでの数を数えられる。たとえば子どもが事物を図であらわすことを覚え、それで事物を観察するようになれば、やがて同種類の同数の事物が常に相関連してあらわれることがわかる。

すなわち人間には二つの眼と二本の腕、二本の足のあること、五本の手指と五本の足指のあること、また甲虫や蠅には各々六本の脚があることなどを認めるようになる。こうして子どもは図を

描くことによつて数を注意しはじめ、数の知識をえるようになる。また同一の事物がたびたびあらわれれば、子どもはそれによつて数の觀念が起こされる。同種類の物がいろいろの形で集合している時には、子どもはその事物のそれぞれの数を知らうとする。このように数を注意し、その知識をえて、次第に計数の能力が覚醒され、発達させられると、子どもの知識範囲は広くなつてくる。この発達によつて子どもの生命の本質的な要求やその憧憬などは満足させられるのである。これまでは子どもは事物の量の多少や、同種類の差異についてはただおぼろげな感情しかもつていない。すなわち事物の種々なる集合の数量的關係を認めたり理解したり、確定したりすることはできなかった。

ところがいまや描画することによつて、それができるようになる。たとえば大きな石が二つ、小さな石が三つあるとか、白い花が四つ、黄色の花が五つあるとかいうように、物の数量的關係を知るようになる。そして数量的關係を知るとは、児童の生活を非常に向上させるものである。

10 フレーベルと新教育運動

人は誰でもアメリカにおける新教育運動を探究する時、そこにフレーベル教育学の根底をなす児童中心主義の原理や創造的自己

活動の原理や労作の原理や個性の原理、そして社会の原理が、ひどく高調されているのに気づくであろう。この運動は次第に發展してチャイルドセンタースクールや、プロジェクトメソッドや、ダルトンプランや、ウィネットカシテムやブラットンプランやフアークブックプランとなり、さらにキルバトリックを中心とするコンミュニティスクールの運動ともなつた。このように考へて、アメリカにおける新教育運動の源泉にフレーベルの教育思想が一つの重要な位置をしめているといつてよい。さればこそ、パウ・モンローも「フレーベルの教育原理を幼稚園以上の高い教育段階に適用しようとする現代および将来の試みは、結局真のフレーベル運動にほかならない」といつている。

周知のとおりデュイの創設したシカゴの実験学校はフレーベルの教育思想と原理と方法との応用であり具体化であるといつてもよい。デュイは『学校と社会』の第五章「フレーベルの教育原理」のなかに「この小学校はその全課程―四歳から十三歳までの児童が在学している―を通じてフレーベルがおそらく初めて意識的に提唱した、あの一連の原理を實行しようと努力していることを暗示するものである」といつている。しかもデュイは、これを明らかに、フレーベルの教育原理を幼稚園以上の教育段階にも適用しようとしたフレーベル運動にほかならないと述べてい

る。デュイイはさらにフレーベルの教育原理として次のものをあげている。

一 学校の第一の仕事は協力的・相互扶助的な生活の仕方について児童を訓練し、かれらのなかに相互依存の意識を養い育て、かれらを実際に助けてこの精神の明白な行爲として実行させるような調整をなさせることであること。

二 すべての教育活動の根本は児童のもろもろの本能・衝動的な態度および活動にあるのであって、他人の観念を借りるにせよ、あるいは自己の感覚に訴えるにせよ、とにかく外部的な材料を提示し適用することにあるのではないということ。

したがってまた児童の数限りない自発的活動、すなわち遊戯や競技や物真似、または幼児の一見無意味な動作―今までつまらぬもの、無用なものとして無視されるか、それとも、積極的に邪悪なものとして難ぜられさえした現象はこれを教育的に用いることができる。

三 これらの個人的な傾向ならびに活動は、さきに述べた協力的な生活の仕方を維持する上に用いられることを通じて組織され、指導されるが、それはこれらの傾向や活動を利用して、児童が最後にはそのなかに入る、より大なる、より成熟した社会の典型的な営みおよび仕事を児童の程度に応じて再

現することを意味するのである。そしてまた児童の生産と創造的な仕事とを通じて、価値ある知識を獲得し確保するものである。

以上のようにデュイイはフレーベルの教育原理を平易に再現し、すすんで「以上の説明がフレーベルの教育哲学を正確に代表している限りにおいては、この小学校はフレーベルの教育思想の主唱者と見なさるべきである」といつている。このようにしてシカゴ大学の実験学校では前にあげたもろもろの活動をできるだけ忠実に正確に、四歳から十三歳までの児童に適用した。しかもその全過程はほとんど、全くフレーベル幼稚園の精神をもつて一貫していたとみることができる。

事実今日のアメリカの小学校を参観すると、幼稚園のない小学校はほとんどなく、しかもその教育内容や方法は幼稚園教育からの自然的な連続発展であつて、決してわが国において現に見受けられるように、幼稚園教育の理論と小学校教育のそれとが別個になつていたり、幼稚園が小学校の縮図ないしは複製品であつたりするのは異つて、幼稚園は小学校教育の初級ないし基底として、小学校教育に密接に関連するようになつている。したがつて幼稚園と小学校低学年とは「幼年教育」として分離できない内面的な一連として考えられている。

(広島大学)

二期の抱負とその展開



清水エミ子

「これはね、ぼくらのクミのだからねー」

「おい、よっちゃんのクミ、ここにあつまれよー」

「よっちゃんのクミとぼくらのクミと、いっしょにやらないか。大きいクミつくろうぜ」

「あたし、あそこにいる子たちのクミに入ったことないから、いれてもらおうかな」

「よしこちゃんいっしょにいれてっていおうか」

夏休みが終わって幼稚園にやってくる子どもたちは、一学期とはちがういろいろの問題を、私たち保育者に投げかけてくれる。

・男・女でのあそびの交流が、だんだん少なくなっていくグループが目立ってくる。

・グループの構成員が、固定化してきて、他の子どもたちが入り込みにくくなるグループができてくる。

・能力差によるグループが、できかかってくる。

九月初の子どもたちをみると、一学期の保育の結果が、ひとりひとりの子どもの電子計算機にかけられて、はっきり、ひとりひとりの子どもに、現われてきていると思われる。電子計算機の答えを、しっかり私たち保育者は把握し、一番、充実する二期に、ひとりひとりに適した保育をしなくてはと、こわさとあせりとのいりまじった一種の期待に胸がはずむ。

二期はじめのあそび

夏休みに家庭でひとりあそびまたは、兄弟姉妹、近所のかぎられた友だちとのせまい交友関係がしばらくつづいたので、みんなとあそぶののしいねということを一日も早く知らせ、集団での話がスムーズに展開していくように方向づけをするための、活動を用意しよう。

夏休みの経験の再現にばかり気を向けて、友だちといっしょにあそぶことの楽しさを忘れてしまわないようにしたい。夏の経験を再現しながら、たのしいゲームあそびや、ごっこあそびに展開するように心がけたい。

夏の採集物をつかつてのゲームあそび

・セミの鬼ごっこ

鬼になった子は、数をかぞえるかわりに、ミーン、ミンとか、ジージージーなど、せみの鳴きごえをして、つかまえに行く。

鬼につかまえられた子も、つかまった時にせみの鳴きごえで鳴く。

・水泳きようそう

ホールのある園はホールで、いろいろな泳ぎ方をしてリレーきようそうをする。

いきは船にのって行って、かえりは船からとびこんで、泳いで来たりしてもたのしいものである。

・トウモロコシはおいしいね

画用紙をまるめて作ったトウモロコシのしんに、折り紙で作ったトウモロコシのつぶをはりつけていくゲーム。全部、べったりはらず、まんなかだけちよこことはりつけておき、次に、ムシャムシャといながら、きまった数だけ、はがしていく。(たべたことにする) はやくはりつけ、はやくはがれたほうが勝ち。

こんなゲームあそびをして、集団の楽しさを思い出させ、むりな夏の再現はさけるようにしたいものである。

9月から、10月はじめごろまでは、この他に運動会の準備がはじまる。

こんなゲームあそびを、子どもたちと話し合いながら団体競技につかったりしてみよう。

リズムあそびなども、むりをせず、自然の動きを、まとめるくふうがほしい。

・たのしい海辺　リズムあそび

運動会場、全部を海にみだてる。年少児がなみになり、水色のボウシでもかぶって、なみのリズムで行進して来て、なみをつくる。

その間を、いろいろのさかなが(年長児) いったり来たり泳ぐ。かながでて来たりたがでて来たり、グループで船をつくってこぎ出したり、元気な子どもが、泳ぎ出して来たりする。全員で、海辺が形つくられたら、全体で海の曲にあわせて表現あそびをして楽しむ。

新しいものを、毎日毎日、練習練習といっってむりをする、せっかく友だちと、ああもしようこうもしようと考えていたことができずに、幼稚園の楽しさが苦しさに変わってしまう。

砂場あそび、水あそび、おすべり、ブランコ、積木、ママゴトと自由な活動、のびのびと友だちとたしかめあえるそぼくな活動

を二学期のはじめは、たくさんさせたい。

この活動を十分に経験させておかないと、後からころみようとするグループでの活動や、ごっこあそびが、発展的に展開していかなくなってしまう。

二学期中頃のあそび

・楽しいごっこあそびを

グループで話し合いながら、立案から実行までの手順を、楽しみながらわからせよう。役割をきめ、分担の仕方を平等にするにはどうしたらよいか、など、問題解決をしながら活動が展開していくようにし、結果をあせらず、ひとつひとつついでにねいに時間をかけて楽しませたい。

保育者が、活動を引っばっていくのではなく学級集団全体が、みんな自分の活動として展開していくよう、指導助言をていねいにしたい。

怪獣^{カイリュウ}ごっこから楽しい絵話しや紙芝居に発展させていく。ガーガー、ウォーウォーと電波を出したり、トランシーバーや無電機でのあそびに夢中である。

このもりあがりをとらえ、そのあそびにテーマを持たせるための助言、誘導をする。

「この怪獣^{カイリュウ}はなにをしようとしているの」「それをするために、なにがあるかな」「いりようなものをつくってやれば」などの助

言によって、創造的な身近な材料の利用をくふうさせ、子どもたちにまかせっぱなしにせず、製作も、劇あそびも、楽しく総合された活動になって展開していく。

女兒の役割も適当にみつけてなげかけ、男女がいっしょになって活動できるようにする。活動が一区切りついた所で、経験したものを絵話しや、紙芝居に再現してみることをさせる。

役割をきめ、話し合い、いろいろな材料（折紙、包装紙、セロファン、広告の紙など）を利用してつくってみる。できあがったものは、たんじょう会、または楽しい会の際に発表しあうようにする。みんなで作ったんだね、みんなで考えてできたんだね、ということ、保育者はひとりひとりに知らせ、自信がもてるように指導したい。

自然発生的におこったあそびを、全体の活動にもりあげていく。この時一番大切なことは、全体のものとしていつ、どのような状態でなげかけたらよいかを保育者は、見あやまらないようにしなくてはならない。

そのためには学級全体のもりあがりと、ひとりひとりの興味の状態を把握していなければならない。

今朝、○○さんたち、品物はこびをしていただけ、あの時、○○さんとおつきりそうになったわね、あぶなかったじゃない」「あぶなくないようにするのにどうしようかしら」と子どもたち

に問題をなげかける。

「せんろかいておけば」「交通のきまりしらせれば」「それならばよく交通整理してあげようか」と声ができる。

こんな発言に保育者は、のりものごっここの活動を、ボンとのせて子どもたちにわたしてあげる。

「それじゃ、あしたは〇〇くん交通整理おねがいね」

「〇〇さんたち線路工事の人たちになってみない」と、何の気なしに活動の役割をわたしてみる。

これで、みんなの興味がのって来たら、園庭全体をつかってのりものごっこに発展させていく。

子どもたちが、活動してみても、ほしくなかったり、必要を感じたものを製作したり、つかったりさせるようにしたい。

保育者が、先まわりして、これで、こういうものをつくりましようというのではなく、子どもたちが、「先生、こういうのつくりたいけれど」といって来た時、これをつくってみたら、と助言誘導するようにしよう。

子どもたちにまかせっぱなしにするのではなく、保育者のねらいを子どもたちの興味と要求にじょうずにのせて、自分たちの活動として展開させるような指導が大切なのである。おもちゃやごっこ、くだものやごっこも同じ。

こんな大きな活動の間には、かんたんで楽しい小さな活動を、なげかけてあげることがを忘れないようにしたいものである。

・日なたで、しずかにお話をきく

保育者の身のまわりのもの、子どもたちが身につけているものを利用して、お話を楽しむ。

「かきの木ぼうやは、こんなに小さな小さな子でした」とハンカチをまるめてかきをつくってはなす。みんなのかきはどのくらい、と子どもたちにもハンカチでかきをつくらせてみたりして楽しい話づくりを子どもたちといっしょにする。

日だまりで楽しくセッセセなど、リズムミカルに。セッセセ、ことしのぼたん、わらべうた、まりつきあそびなどを楽しもう。そぼくな、家にかえてもお母さん、兄妹といっしょにあそべるあそびを多く取り入れたいものである。

体力をのばし、がんばる力をつけるための体育的なあそびを取り入れよう。

なわとび、まりつき、のぼり棒、とびばこなど、自分の程度に応じて努力し、れんしゅうし、マスターしていく楽しさを味わわせながら活動させよう。なわとびなどは、練習すればできるようになるのだということを、根気強い子の例を子どもたちに示して、まげずに努力するようにさせる。

体育の日などを中心に、体育カードのようなものをそれぞれ子どもの手でつくらせ、なわとびがとべるようになったら、なわとびカードに合格のスタンプ（いもばん、ねんどばんでつくったもの）をおしていく、そして保育者に合格した日を書き込んでもらうようにさせる。

・友だち同士教えあい、はやくグループ全員が合格できるよう、グループごとのはげましあいの場に活用する。

「ナワが前に来た時、ジョンととんでごらん。はやくとぶからだめなのよ。はじめはかけだしながられんしゅうするとはやくできるよ」

「手をうんと大きくうごかすんだよ、そうするとつかかからないよ」と、指導のしかたも子どもたちに学ばせたい。

友だちのあらをさがすのでなく、はげましあう友情を育てよう。

とびばこなど、二段合格、三段合格と級をつくり、カードや、スタンプの色をかえておくとねばりづよく努力する。

五歳児年長児の二期期には、このように努力したら、こんなよい結果が生まれるのだという自信とよろこびを、しっかりつかませたいものである。そのためにも、なわとび、とびばこ、鉄棒、まりつき、などはよい活動である。

こんな活動のあとに、まとまったルールのある活動をなげかけると、おどろくほど楽しんで全員で参加してくる。

・ソフトボール大会をしよう

時間をかけて、野球のルールを全員に知らせる。女兒など、男児よりよるこんで興味を示して来る。

ボールを手で打ったり、ピニールのバットで打ったりしてくりかえしながら、ソフトボールのルールを全員にわからせ、グルー

プ対抗ゲームをする。

グループでどうしたら力を合わせられるか、本当の協力のしかたはどんな助け合い方がよいのか、問題のおこった時に、ひとつひとついいいにあつかって、二期期終りのしめくりりにソフトボール大会をして楽しむのもよいでしょう。

こんな遊びから生まれたよろこびや問題をテーマに話づくりをし、劇あそびに発展していくように仕向けよう。

・ソフトボールのたまのとりっこ

○○さんが、なまけたから、まけちゃったなどというテーマを楽しい話づくりに進めていこう。

二期期の年長児は、一年保育も二年保育も、手かげんはいらない。それぞれの学級の状態に適したように活動を展開し発展していくようにすることが大切である。

計画（立案）から展開までを、保育者が表に出て引っぱるのでなく、かげで指導、誘導して、子どもたち自身での活動にさせることが大切である。

子どもたちの好みに流されてしまうことをふせぎながら、領域の総合を考えて子どもたちに活動のきっかけをなげかけるようにする。ひとつひとつ、こころやったから、こころなつたのだという関係を、把握しながら、よろこびと、自信をつかませるようにしたいものである。

（大田区立蒲田幼稚園）

二学期の抱負とその展開

—集団のなかでの

ひとりひとりを大切に—

岡 田 鈴 代

(一) はじめに

自然にめぐまれていない中心地の幼児たちは、夏休みの間、どのようにしてすごしたかしらと思います。いろいろの生活経験を話し合いますうちに、びちびちと楽しくすごした経験発表を聞くことができますとともに黒々とした顔をみることもできましたので、うれしくなりました。

休み前の父兄懇談会に、休み中の計画の一つに海や山、また、田舎などのプランもよろしいが、日常の平凡な生活のなかにも、アイデアをいかした夏らしいあそび、また、この時期に味わってほしいことを心がけてほしいのですと、お願いしたのでした。

例えば、水あそびを水着にきかえさせてあそばせたり、夜空の星を家族みんなで眺めながら話し合ったり合唱をしてみたり、お兄さんや、お姉さんの採集の手伝いをしたりなど、ひとりひとりの家庭でできる範囲内で十分楽しめると思います。

それにしても、ある面では、一学期当初にもどった幼児がみられたことも確かなことです。しかし一日も早く生活のリズムを、ルールにのせるべく努力もしなければと思いません。そして、この機会に、グループを大きく広げるとともに、みんなが協同であそぶためには、ルールの必要を感じさせて、ひとりで何かをするより、お友だちと一しょにした方が、いろいろの面で楽しいといった経験をさせたいと願いながら、それぞれの幼児に情動的な安定をさせたいと思います。

(二) 二学期における展望

ともすると、私はつい二学期こそといった気持だけが高度な教育計画にはしり、幼児が思うように活動してくれないと、いらいらしたりする危険がないだろうか、毎年反省するのです。それには、一年保育の弱みが幼児の活動に支障をおこしているのではないかと

思いますとともに、教師としてのあせりだけが頭をもたげてきます。常に、まわり道をしながら幼児の芽生えを育てていくのだと心にきめていまして、一学期で果たせなかった面を、二学期で満たしてやろうと、ハッスルする傾向がないでもないのです。

それにしても、現実の段階では、目前にいる幼児らに合った計画以外価値がないと思いますので、計画通りレールの上で活動させるなどといったことは考えていません。

幼児は、明日から、どんな活動を展開していくか未知なわけですから、どんな場面に直面しても、さっと支えてやれる包容力が必要だと、いつも自分にいいきかせております。それとともに、幼児が表現するあそびの内容と、ひとりひとりのあそびの關係について注意深く目を向けることが大切ではないでしょうか。いままでは、ごっこ遊びにしても、空想の場面や即席の材料でまにあっていたものまで、あそびの内容によっては、部屋の片隅によせたまま使用しないこともあります。

園内にある物的環境は、全部知っているわけですから、自分たちが遊びに必要な感じますと、あちこちから持ちより組み合わせで創作します。何とか、自分たちの力で創作することができるわけです。ですから、そのような時にも必要な条件がすぐ整えてやれるように配慮できればと思っております。

このように、創作活動が自然に遊びのなかに多く入りこんでくるとともに、グループ間との交流や役割もおのずから活発に動き

だしてくることが予想されるのです。そこで私は、幼児らの活動の発展をおいながら、すべての場面におこる、いろいろの問題点に對して、どのように助言すべきかふうしなければならぬと思っております。

(三) 展 開

二学期になって、一、二週間ほどたちますと園生活は軌道にのりだします。すると、夏休みで、幼児らの成長したことにまず驚きます。それに体力ができた点、敏しょう性を要するゲームあそびにたくさん参加します。そして、いくども活発にくり返しあそんだ後、しつとりと汗ばんだ身体を木蔭で涼しさを求めている姿がみられたりします。

しかし、二学期もなけば頃より、共通の目標をもって活動をすることが可能になってくるのでしょうか、いろいろな問題点にぶつかります。それらの時に、よくみられる幼児のひとりひとりの創意や思いつきを、友だちの間で十分發揮できるように配慮したいのです。そして、真に豊かな集団的な活動が拡大していきますように注意してやりたいと、せつに思うのです。

しかし、現実には、その場その場に直面すると、幼児の理解にたつて、肯定的な指示ができずに幼児たちに申しわけなく思うことがたびたびあります。

それでは、私のつたない実践とともに解決できた面、また、問

題点となつて、日々苦しんだ面の例をあげてみたいと思います。

(1) 共通の経験をもとに、創作表現を広めるなかで

ようやく暑さもやわらぎ、しのぎよく過ごせるようになりまして、自然幼児らは、周囲の環境に敏感に反応してきます。ちょうど、この当地で盛大に行なわれます秋祭りには（九月二十六、七日）、中心地だけに各家庭でいろいろ祭りについての話題がでるのです。園もその日はすこし早いめの降園で、幼児らは、勇み足で、ごちそうのまわっている家庭、練りや山車のでる町へと降園するのです。そんな町全体の雰囲気は幼児らは肌で感じてか、少々落ち着かない面もありますが、うれしいことがいっぱいといったようすがみられます。

そして、そのような雰囲気は反映させて、山車が園内を練りあくるのです。

幼児らが目の前でみた大きな鯨船や、お入道を、自分たちも一度引っぱってみたい。こんな気持ちの高まりが、すぐ創作意欲に発展したのでしょうか、無口な幼児も、消極的な幼児も、それぞれ自分のできる範囲で（鈴を通してたり、箱に模様を描いたり）活躍しているのです。昨日みたような、でっかくてのれる船をつくるんだといった、ガンバリの力がでてくるのです。まず、遊具の箱車の上にボール箱の大きいのをのせて、釘を打ちつけて固定させ、紐に鈴を通して両側にいくつもさがるように結びます。早く

引っぱってみたいので、一つ作業ができますと、まず園内を回り、ひっぱって喜んでいきます。

太鼓をたたく幼児、ひっぱる、のるなどしばらくは満足感に浸っておりますが、さらにより本物に近づけるため、もつとぴかぴかした船にしようといひだしたりします。

私は、すこしでも幼児らの期待にそうようと、金銀紙や小箱、細い竹などを用意しました。すると今までのよりキラビヤカな船をつくります。（金紙を貼り、チリハライを上下反対にして船先に立ててみるなどアイデアを考えます）そして、ひとまわりのつたらかなにのる人は交代することを自分たちで決めて、お祭り気分を味わっているのです。いたんだりしますと、その都度修理したり、いくらか改良したりしながらあそんでいるなど、興味の持続がみられました。動く鯨船を自分たちでつくり出した喜びと、感動の再現によって、あそびに楽しさが加わり、次々と製作意欲が上昇した面がみられました。このように、まったくの偶発的に行なわれた活動のなかでほとんどの幼児と教師が一体になって協力できた喜びが、いつまでもほのぼのと残っているのです。はっきりした目的をもつ幼児、また何らかの目的を意識して活動した面を今後のあそびの中においても大切にしてやりたいと思ひました。

(2) グループのなかで、ひとりひとりの行動を大切に

育てていくなかで

(1) H児とグループの関係について

運動会の材料を使って売店ごっこに興味をわいた時のこと、運動会に使用した花のアーチ（高さ、二m五〇、幅、三m）をままたごコーナーの入口にでもと部屋の中においておきました。すると、これを見つけた幼児たちは、お部屋の窓口に利用し、アーチの内側に机を並べて、「うちら、お菓子やさんさ」と女兒の間ではじまりました。綿菓子と違ってビニール袋につめて窓口に並べますと、二日ぐらい売りがかいました。だが店屋の主人が三日目に男児Hになり、「この店な、駅にある店さ」といって交代しました。そこで、いままであそんでいた女兒がどのような感情をもっているかと思つて、「あなたたちも、お店ほしいのでしょ」と聞きますと、「もういいの、したくないの」といって別のあそびに移行していきました。そのようすもあまり続けてあそびたいようでもなかったのです。H児にそのまま、「こんどは、どんなお店かしら」といって、ようすをみていました。すると、H児の日頃仲よし友だちが、せつせと店の品物をおきかえているのです。それに、参加者が男児ばかりで品物も、本や駅弁当といったものです。サンドイッチといつて、ボール紙をパンの大きさに切り、間に牛乳のふたや、セロハンの端紙を入れてゴムでとめたのを折箱に詰合わせたものでもできましたが、程度としては、たいしたことのない内容ですが、このH児らなりに一生懸命なのです。

Hは日頃、体力的なあそびを得意とする幼児で、あまり室内で活

動していることがすくない方なのに、どうしてか、この店が気に入ららしく、盛んに並べ、終わると、「はよ、かいてきて」と買手を求めますが、客はすくなく、一人二人で、とくに女兒らには、腕白でいたずらのH児におそれているようで、不思議そうにみていて、よつてこないのです。

私はこのようすから、完全にこのH児は疎遠されている気配を感じ、この幼児らのためにも、H児たちにも、自分たちで仲よくあそべるにはどうすればよいか、会得させるべきチャンスだと思ひまして、どうしても他の友だちとも交流せざるを得ないように、「このお店折角できても、お部屋の中では狭いから、お庭に移して下さらない」と頼みました。

「うん」といって、軽々と力のある男児は園庭に移して開店してくれました。そこで私は、汽車ごっこつながりをもってあそばないかしらと思ひ、みんなのよくみえる場所へ石灰のはいたライン引きをおきました。

すると、Yがみつけ園庭に白線をくねらせて描きはじめました。一本、二本と並べて引くところは、運動会のライン引きとはちがひ、自ら線路のつもりだったので、私は内心うれしくなりYの後ろについて、「この線、長いのね、どこまで続かしら」といいながらはしりました。それに注目した幼児らは、早速縄電車をもち出しはしりはじめました。

すると、急に外が活気づいてきます。参加人員も徐々に多くな

り、売店では、サンドイッチ、お茶、ジュースといういろいろ買求める姿がみられ、自然おそれていた女兒たちも仲間入りをして楽しんでいのです。しかしこんなに自然に交流したかみえても二日ぐらいあそびましたが、その内容に深まりがみられず、私には物たりなく思えてくるのです。

なぜ交流したかみえたH児が気になるのか考えてみました。お店を他の友だちに交代できずがんばっている点、また、自分の仲よし以外の幼児からは問題にされない存在にある点がみられました。そこでHグループのひとりひとりと、他のグループのひとりひとりの個性を伸ばしつつ、幼児対幼児のふれ合いをもっといろいろの場面で深めさせたいと思ひまして、幼児対教師、幼児対幼児の話し合いをあそびに参加した者全部でしました。

集団のあそびを楽しくするには、自分自身をコントロールしていけるようになればよいと思ひますが、それまでの間、つまりお互いの意見や自我がぶつかり合うこの段階で、どう対処すればよいのでしょうか、とにかく遊んだことの話し合いをもちました。すると、「H君たちも、電車になったりするの」「お店やさんもかわりっこしたらいいやんか」など。

また、電車になった方の役割についても、話しができました。「折角ジャンケンで決めたのに早くかわるの」「そうなん、それでおもしろくないの」とか、「今日は、ぼく全然切符切りにならなかったもん」など、満足感が味わえずに終わった幼児の間から

は、懸命な意見ができました。

ところで問題のHはあまり話もせず、「かわつたらええやろ」といっただけです。しかし、みんなの話し合いを聞いていこうちに、なにか納得した面がうかがえましたのでいくらか安心しました。それから二日ぐらい。一応汽車ごっこが發展したかのようみられましたが、決めた役割の順番が後になった幼児は、まちきれずに、他のあそびに移行していき、日がたつにつれて、客の数が少なくなっていくなど、その辺のタイミングを合やすのは幼児らにはむずかしく、あまりにも多くぶつかる問題に対して、教師自身もいささか、スランプ状態に入りそうになりました。

しかし、気になっていたH児は、ルール違反をすると、他の友だちおおせいで注意されるので、以前のようななずるさとか、腕力はいくらか、かげをひそめたように思われました。

ひとりひとりが協同であそぶには、ルールを決め、それを理解しなければ、お友だちの仲間に入れてもらえないということを幼児なりに感じとったと思われました。

また、その反面、幼児間でいくつもの役割あそびを展開すること事態むずかしいのではないかしらと思ひました。それで、役割分化に無理が生じないように思ひまして、それ以上のことは望みませんでした。

(口) ロボットつくりから劇あそびに發展したK児について

ロボットつくりから劇あそびに發展した時のこと、中、大型箱2

個を利用して、自分が上からかぶれるロボットをクラスで人気者のK児ら三人が、(この三人組は、いつも創作力にすぐれていて、何かと創り出す時の顔は、素晴らしい童顔に接します。特にK児の、のびのびとした明るい性格から生まれ出す作品からは、ダイナミックな面がみられました) 考察しました。

そこで、完成したロボットを頭からかぶり、腕をだし、目をだして、ゆうゆうとあるくようすはおもしろく、他の幼児の注目のまどになりました。「先生、K君みたいなロボットかして」教師「そうね、きいてごらん、先生もかぶりたいけどK君はかぶりがくて一生懸命につくったのだから、今すぐかりるのちよつと悪いわ」といいますと、「よし、僕もつくろう」といった意欲のでてくる幼児も現われて、一応それらしく、口や目を切り抜きますが、ちよつとしたくふうによってできばえに差がみられますので、やはりK児たちのロボットの方が人氣がよいのです。

これをチャンスにして、今まであまり経験したことのない劇あそびに発展させてみようと思いました。

ちよつと、十二月でもあり、部屋にはツリーなどの飾りつけもでき、心楽しく、クリスマスを待ちあこがれている雰囲気も手伝ってか、それとも、K児の家庭が大きな製パン工場で、クリスマスの日には、園にも、このK児宅から、ケーキが届くことになっていますので、時々、友だちに、「僕の家から、おいしいケーキを、つくってきたでな」ともらっていたのが原因になったので

しょうか、T子たちから「Kくん、早くケーキつくってきて」とせがまれていました。この機会に子どもたちの気持をロボットで十分に表現させてやりたいと思い、ロボットと楽しくあそんでいる時のようすを、そのままとめてみました。

あらずじは、ロボットロボチャンは、どんなケーキでも注文通りの品物を焼きます。

その注文に来るのは、森の動物たち(こりす、きつね、こぐま、さるなど好きな動物になるのです)。ロボチャンの家の中には、ツリーが飾られました。

「こちらは、おいしいケーキや、パンをつくるお店ですよ。さあ、どなたでもいらっしゃい」からはじまります。その時、

「ロボットロボチャン、今日は、おいしいケーキを下さいな」と自分で即興的にふしをつけて、次々と動物たちが注文にきます。

「あのね、ぼくはクリーム台にして」とか「たくさんミルク入れてよ」とか、注文に来た動物がいろいろ好きな形を注文しますと、ロボット組は「はいはい、明日のクリスマスまでに、やいておきます」

そこで、歌をうたいながら焼く表現をします。歌「ロボットロボチャン、エブロンつけて、さあ、さあ、さあ、ケーキをやきましょう。たまごにミルク、かきませて、おいしくおいしくやきましょう」(小林恵子作詞中村太郎作曲の「森のクリスマス」の歌を参考にさせていただき、すこし、アレンジしました)

この歌を、二、三回歌いながら、ケーキを焼く表現をします。

ここで、ロボットの表現ですから、大変ぎこちなくおもしろいので、一同は大笑いをするのです。おいしそうな匂いをかぎつけて、動物たちは大喜びで、「ぼくたちも手伝ってあげましょう」といって、動物も一しょになって、もう一度、うたいながらケーキを焼く表現をします。大きい箱ケーキを中央に並べ、ロボット

「さあ、こんなに大きいのが焼きましたよ」動物たち、「うれしい、うれしい、ロボットロボチャンは、じょうずですな」といいながら、焼けたケーキを大きな皿に並べ、ケーキにサンタの顔をしたローソク（父兄からいただいた物）を立てて、ナイフの用意をする。ここで、ローソクが大きいので安全だろうと思

い、私は火をつけてやります。そして、みんなでメリークリスマスの歌をうたってケーキにナイフを入れ、みんなでいただく表現をして終ります。

以上は概略で、参加人員は十人です。ナレーションや情景、それに会話は、参加者によって、いくらか変化しますが、こんな劇あそびには、形の制限がない上に、自ら選んでする経験や活動がうまくなるといった程度でのびのびと参加できるのが強みです。

二期も後半に近づきますと、誰々は、創り出すことが得意だからと、その幼児を仲間のなかで認めあったりして、お友だち関係が安定してくるのではないのでしょうか。腕力を用いるような喧

嘩などほとんどみかけなくなります。また、お友だちの感情をうまく受けとめることとうまい幼児ができて活動しだすと、他の幼児たちも仲間に入り笑いがとび出します。

このようにあそびの主になる幼児によって、感情が豊かになり、あそびの内容が深まる場合もあるのだと思います。

(四) おわりに

二期らしきといったイメージが強く頭をかすめると、どんな場面に直面しても、これでいいのかしら、もっと遊びの内容が豊かに充実しないかしらと考えさせられます。

でも、幼児たちのひとりひとりの発達ということから考えてみますと、二期らしいという、みかけ程度の高そうな経験や活動をおってみても、意味がないのではないのでしょうか、すなわち、集団的な行動の多くなる二期においても、やはり、ひとりひとりの幼児の行動や感情を大切にすなわち、幼児の社会的な行動をのばしてやりたいと思います。

そしてそのような経験を通して、幼児と幼児との集団というなかでの相互のふれあいをより深く豊かに育てていきたいと思

います。三期においても、やはり、あせらずに足もとをみつめ、幼児を大切にしながら豊かな経験を通して、幼児の発達を十分にさせてやりたいと思います。

(四日市々々立中部幼稚園)

上 沢 謙 二

「保育界の忘れられない人」という題に接して、先ず思い出されるのは「倉橋惣三」という名であります。この名に、はじめて接したのは、大正十三、四年頃だったと思います。

雑誌「幼児の教育」に、毎号、掲げられた巻頭文がそれであります。

たぶん、先生は、その主筆のような位地にあっと思われれます。

それは、一ページくらいの短いものでしたが、まことに味わいのあるもので、私は、それにひきつけられました。そのところどころを、自然に暗記して、ふと、口の中でくりかえすことも、時々ありました。

「幼稚園雑草」とか「幼稚園保育法真諦」とか「子供讃歌」とかいう著書は、むしろぶりつくようにして、読み入り読みかえました。

まず、先生は「天成の幼児教育者だ」といえましよう。

大学在学中から、いかに、この方向に思いをひそめ、力を入れられたかは、著書の「子供讃歌」の中に、はっきりと描きだされています。実をいえば「思いをひそめ」とか「力を入れられた」とかいうのは当たりません。「おのずから、われ知らず、そうなった」というのが、より真相をあらわしているでしょう。

一高の学生時代から、よく、お茶の水女子大学付属の幼稚園へ出かけました。誰にたのまれたのでも、誰と約束したのでもありません。時間があると、むしろ自然に、その方へ、足がむくのです。

「子供讃歌」の中の一節をひきましよう。

「ふらりと、湯島通りの門からはいると、すぐ庭の方へまわって、幼児たちの中へはいって遊ぶ。一高の学生というので信用されたものか、おばさんのような先生方や、姉のような先生にも懇意にされたが、一番、親しみ迎えたのは幼児たちであった。『おにいちゃんがきた』幼児たちは、彼のそばに集まってきては、そういって、ひっぱりまわした」

後に、その学生が、そのお茶の水女子大学の科長に就任し、その幼稚園の園長になったことも、まことにほえましい因縁といえましよう。

倉橋惣三先生(その二)

先生は教室において学生に講義をしましたが、特別な会場において、一般の人々にむかつて講演もしました。講義にも特徴がありました。講演にも特徴がありました。

いささかも気づけたりしません。ありのままのようすで、にこにこしながら、やさしいことばで、簡単な組立てで話しました。その態度と内容には、田舎のおじいさんおばあさんもひきつけられました。時々、さしはさまれる一種の洒落(しゃれ)とユーモアには、誰でもひきこまれて、いっしょに笑わないではいられませんでした。しかも、先生としては特に笑わせようと思ってそういうのではありません。その場の調子で、おのずから出てくるのです。だから、いささかも人為的でなく、まったく自然です。だから、深く相手の気分にあわせて、心からの笑いを触発するのでしょう。学術的な講義者としても独特なものをもっていた先生は、通俗的な講演家としても、他の及びがたいものをもっておりました。

先生自身がこのことを自覚しておられたようです。深い学術的な理論や専門的な問題を、一般の人にわかるようにこまかく噛みくだいて、やさしい形式で、興味深い表現で発表することに、人知れぬくふうと努力を傾けられたと思われます。

こういう先生が、わが国の教育界の一つの中心であるお茶の水女子大学におられたということ、しかも教育の一般化民衆化が叫ばれはじめた明治時代におられたということは、先生一個人の立場からでなく、わが国の教育界という広い観点から見ても、意味深いものがあったと思われる。

公的な講演の時だけではありません。私的な対談の場合でも、先生の特徴ははっきり出てきました。

「温顔温谷」ということばがありますが、先生は正にそれに当たると思います。

むきあつて話していると、自然に、あたたかいのんびりした気持になります。その間に、巧まないユーモアがしばしばはさまれるので、教え導かれるという以外に、一種のたのしみでもありました。

倉橋先生は学者であり、教育家でありました。しかし更に詩人でもありました。

幼児教育と発達心理学

藤 永 保



心理学から教育へ

日本の心理学の傾向は、私が東大の心理学科を出ました頃とは、非常に変わってきています。私が学生の頃は、実験心理学が盛んな時であり、実験心理学をやっていなければ人間ではないという雰囲気がある東大にあって、教育心理学や子どものことをやるのは、いわば、オーソドックスな世界から脱落した、はしにも棒にもかからない連中だという雰囲気の中で、私は育ったわけです。しかし、最近では、そういう傾向というのは、正に一変したと思います。

現代の心理学者の中で、若い方々の関心の一つの中心は、発達心理学、あるいは、発達と教育の関連を考えることにあると言えます。私は、そういう若い方々の中では比較的年青なので、なん

となくいろいろな場面で代表あつかいをされるのですが、別にそういうことではなくて、若い方々といっしょに研究していきたいと思っています。

私は十三年間、東京女子大の心理学科にりましたが、その研究室のメイン・テーマは発達心理学でした。私自身は、元来、実験心理学の出身であったわけですが、卒業論文では、子どもの記憶の発達ということを研究しました。そんなことで、次第に発達心理学に興味をもつようになったわけです。

後で、くわしく述べますが、私がそういう研究をやりはじめた頃は、発達心理学の傾向というものは、かなり、古典的と言いますか、伝統的なやり方をしていまして、一口に言いますと、たとえば、一歳になるとどの位のことができるだろうかとか、二歳になったら、それがどういうふうに変わるだろうかとか、いわば、木や草が一年たつと、二十センチになり、二年たつと、三十

センチになり、三年たつと四十センチになると、そういうことを測っている段階であつたわけです。学問の発達段階として、そのような段階にあつたのは、やむをえないことですが、次第に、考え方が進んできますと、それだけではなくて発達というのは、一体どういう条件に左右されているのだろうか、望ましい発達というものを、もし仮に人間が早めることができるとしたら、そのために、どういう処置をとつたらよいのだろうか、ということがだんだん考えられるようになって来ました。

そこから、私は、次第に教育ということに関心をもつようになり、お茶の水女子大の教育学科に移ることになったわけですが、

私は女子大学にばかりおりますが、女子教育の専門を志したわけではありません。なんとなく偶然にそうなつたわけですが、考えてみますと、これからの女子教育というのは、非常に大切なことではないかと思つています。女性はなんといつても、人類の半数を占めるわけですから、その中にある才能をひきだすということとは、今後の人類にとって、大切な課題であると思ひます。

同様に、幼児教育というものも、そういう意味で、これから大切な教育の一つの分野になるであろうと考へているわけですが、私にとっては、重要な二つの教育の分野にいつのまにか、かかわりをもつようになったことは、非常に光栄だと思つております。

私の経歴から、おわかりのように、心理学から教育へということ、教育に片足を突っこんだというようなところであり、必ず

しも、私が教育学そのものを学んだとか、教育実践という立場から出発したわけではないのでありまして、その辺の所に、弱点があるわけでは

ある所です、お話をしたのですが、非常にはっきりものを言うあの幼稚園の先生が「中央から学者と称する偉い先生がよく来るけれども、話はみんな抽象的な理論的なことばかりで、現場にいるものは、明日、すぐに役立つものを聞かせてもらいたいと思つているのだ、そんな説教ばかりされても、何の役にも立たない」と言われまして、私などは、全くそのところが弱いと言えます。これから書く内容も、あるいは、幼稚園教育を外側から眺めている人間であるため、見当違いであつたり、すぐ役に立つようなものではないかもしれません。唯、発達心理学が原理的な抽象的なものであつても、日々の教育実践に、いくらかでも拡張して応用できれば、非常に光栄であり、嬉しく思ひます。

これからの教育における幼児教育の位置

最初に、これからの教育において幼児教育の占める位置ということについて、ちょっと、前置きとして、ふれておきたいと思ひます。

幼児教育は、いままではどちらかと言いますと、必ずしも、高い位置を占めてこなかったと言えます。世人の偏見であると言つ

てしまえば、それまでですが、必ずしもオーソドックスな、高度な教育の場とは、みなされていなかったということは、残念ながら、事実であったと思います。

正當な学校教育に入る前の準備段階程度に考えられている場合も多かったのではないかと思います。失礼な言い方であるかもしれませんが、先生方、先生方のほうも、幼稚園の先生になられる方は、子どもが大変好きだから先生になられたという方が非常に多いようです。

私は、「子どもが好きだ」ということは、幼児教育者として、第一の資格だと思っております。そのことが別に悪いと考えているわけではないのです。しかし、子どもが好きだということが幼児教育者として、果たして完全に十分な条件になるのかといえますと、そのところは、そう簡単に割り切れないものがあるのではないかという感想を持っています。

そして、現在のような、幼児教育の見方というものが、将来も果たしてそのままであろうかということについて、少し考えてみたいと思います。

現代は、教育爆発の時代と呼ばれており、世界各国で、教育というものが、これほど大きな地位を占めるようになった時代はないのであります。その背景には、ご承知のように、さまざまなき事情があるわけです。経済水準が上がれば、自然に高い教育水準を求めるといふこと、これは、ごくあたりまえのことだろうと思

います。

逆に言って、生活水準を高めるために、逆に教育水準を高めるということが要求されることがあるわけです。

日本が明治以来こういふふうには、発達したのもある論者に言わせると、義務教育が普及したからだといふようなことになるようですが、世界各国の後進国で、やはり、教育というものは、生活水準を上昇させる尖兵としての役割を持っているため、教育に対する関心が非常に増大しているように思います。あるいはまた、アメリカとソ連との教育競争が非常に激しくなっております、こういうふうなことも教育の爆発を支えている要因ではないかと思ひます。

その他、いろいろあるだろうと思ひますが、私が考えて最も大きな理由というのは、いろいろな技術革新が進んで、オートメーションということが非常に進んでまいりますと、さまざまなき業というものが、昔は高い価値をもっていたわけですが、機械は、単純労働や手工業の世界から人間を駆逐しまして、だんだん機械が置き換わっていくという時代になってまいります。

あるいは、最近になりますと、コンピューターというものが出てまいりまして、今まで人間だけの領分だと思われていた世界まで機械が置き換わっていくとしています。

ただ、余談であります。私自身は、コンピューターの可能性については、将来、詩をつくったり、ロボットのかわりをしたり

するようになるだろうという非常に樂觀的な意見もあるようですが、コンピューターのはたらしには限界があるのではないかと考えています。

一つの例をあげますと、コンピューターに翻訳をさせるために、学者がアメリカの言葉で、*Out of sight, out of mind* ということわざを使ったのです。これは、文字どおり、見えなくなれば、だんだん忘れてしまうという意味ですが、コンピューターは、「氣違いが泣いている」という答えをうちだしたそうです。

確かに、考えようによっては、*out of mind* というのは、氣違いととれないこともないし、*out of sight* というのは、目が見えないわけですから、涙で目が見えないと解釈することも、できないわけでもありませんが、人間が解釈したら、少なくとも、そういうことは、やらないのではないかと思います。

やっぱり、コンピューターと人間の頭の働きとは、根本的に違うのではないかと、私は思うわけです。

しかし、片方の楽観論もやはり無視できないわけでありまして、こういう時代になりますと、ますます高度ないろいろな人間的能力というものが、生産の場でも、さまざまな技術をつくり出す場でも、要求されてくるようになってくるわけだろうと思えます。

それから先にさらに重大なことは、今までのことは便宜的理由にすぎないわけですが、コンピューターというものが人間の頭脳

のかわりをするといわれますと、私たち心理学者としては、やはり人間はもっと違う、もっと独特な、いわば、人間の尊厳と言いますか、そういう重要な特徴をもっていると考えたくなるわけです。

そして、それが人間の尊厳と申しますか、まさに人間だけしかできない能力で依然として、人間らしい前途を求めていくにはどうしたらよいか、ということを考えなければいけないだろうと思えます。

そのためには、教育の場に、従来よりも、もっと、高度なさまざまな精神的、人間的な能力を養成することが要求されるようになってくるのではないかと、思うわけです。

教育の役割というのは、ますます重要となりますし、幼児教育の方には、より高度な教育がこれから望まれていくことになるだろうと思えます。

目標達成のための二つの方向

それでは、そういう目標を達成するために、どうしたらよいかということですが、これも、私は専門ではないのですが素人考えでは、だいたい二つの方法があるように思えます。

第一は、いうまでもなく教育の現代化という方向であります。

今まで、おこなわれてきた伝統的な教育の中から不必要な部分と言いますか、あるいはムダな部分と言いますか、そういうもの

をできるだけだけ省いて、もっと能率のよい、そして現代の科学の発達の第一線に追いついていけるような教育をしたいと、こういう運動を教育の現代化運動と言います。こういう運動はソ連でも、アメリカでも非常に盛んなわけです。

具体的に一例をあげますと、私たちが子どもの頃、算数の中で、鶴亀算とか流水算とか非常に難しい算術をやらされたものですが、私たち、思考心理学をやっている者の目からみると、それらの解き方は、非常に難しいものです。全部を鶴と考えた場合、足は何本あるかという思考法は代数を使う場合の思考法よりも、非常に難しいと思うわけでありますが、昔の教育は、むしろ、そこが逆になっていまして、難しいやり方を先に教え、あとで代数というやさしいやり方を教えることになっていました。現在の教育学者はそこらのところからムダを省くことはできないだろうかとか、代数を先に教えてしまえば、やっかいな複雑な思考法を子どもに要求しなくても、いいじゃないだろうかと考えるわけです。

私たちの子どもの頃も棒暗記のような仕方、鶴亀算を解いたのですけれど、そういうことはやらないで、もっと誰にでも解けるような方法を教えようということがやられています。これは中国、ソ連などでも、やられておりますし、小学校の上級生に代数を教えようというところのみが、立派に成功しているという報告がでている場合もあります。

日本の小学校も、だんだんそういう方向に変わっていくこと

は、すでに知られていることです。

ただし、ここで皮肉なことに、母親の方が子どもに追いついていけなくなるものが起こってきました。アメリカの話ですが、今まで、子どもに教えることによって、威嚇を保っていた母親が、だんだん小学校の算数が難しくなってきたために教えられなくなり、これでは困るという声が強くなってきました。そこで、母親や父親を再教育するようなセンターが作られているようですが、今に、日本にも起こりうるような、そういう方向が一つあるわけです。

二番目に私が考えますことは、新しい教育可能性の開発によって、今、教育の場に要求されている教育の高度化という使命をなんとか成し遂げようという動きがあるのではないかと思えます。その中では幼児教育は非常に大きな可能性をもってとりあげられる運命にあるのではないかと私には思われます。企業内教育とか職場教育とかいう新しい形の教育の場は、ぞくぞく開かれているのは事実ですが、こういうものは、なんととっても、補足的な役割しか果たさないわけです。それよりすべての人におこなわれる教育の場において、今のような教育の高度化という要求が成し遂げられれば一番正しい正当な解決法であります。そういう意味では、幼児教育は、おそらく、最も大きな、最も未知の可能性を秘めているだろうと私は考えるわけです。

これは、後でいろいろと触れますけれど、たとえば、一つの例

を上げますと、時実先生や、その他の大脳生理学者の意見によれば、人間の脳細胞の数は、生まれた時に決まっております、百四十億あるそうです。そして最終的に、人間はその数のどれ位を使っているかと言いますと、おそらく三分の一か、四分の一しか使っていないのではないかという意見があります。もしも、欲張って、その脳細胞をすべてうまく使うことが可能となりましたら、われわれの考えているような人間の能力というものをもつてはるかに越えた、もつとすばらしい能力をもった人間ができあがるかもしれないと考えられるわけです。

確かに、事実、創造的な人間といわれるような人々を考えてみますと、そういう人の中には、非常に豊富な多様な、さまざまな人間的な関心なり、知識があったということは事実であるように思います。

たとえば、進化論をつくりだしたダーウィンというような例を考えてみますと、案外知られてないことですが、ダーウィンは本当は牧師さんになるつもりだったわけです。見習牧師の修業をしようとした時に、例のビーグル号の航海に誘われて、南米各地を歩き、古生物学的資料をたくさん集めて、動物というものは、だんだん一つの方向に進んでいったのではないかという考えを持つようになりませう。

たとえば、非常に古い形の象はたいへん小さいものなのですけれど、年代がたつにつれてどんどん大きな象に変わっていくとい

うように、進化というものは一定の方向性をもっているという考えは非常に早くからダーウィンの中に根差していましたけれど、彼は十数年間、そういう資料を暖めていて発表しようとしなかったわけです。なぜ、発表しなかったかといえますと、そういう進化という事実を統一的に説明できる原理がみつかるまで、非常に慎重に待っていたということらしいのです。

何が、その起源を与えたかといえますと、実は、生物学などの研究ではなくて、ダーウィンがたまたま経済学の本の中にマルサスの人口論をみつけて、この中で、自然淘汰という考え方にぶつかるといいます。つまり、優秀な人間は生き残り、劣等な人間は駆逐されるというマルサスの意見を読みまして、ダーウィンは、はじめ、進化論を支える原理を発見したと考えました。

自然淘汰というものが、そういう優れた生物を育て、生き残らせ、一定の方向に生物を進化させる原理であると思ひだして、はじめに進化論を発表するようになるわけです。

こういう、今の経路を考えてみますと、ダーウィンという人の中には、非常にたくさんの方に豊富な関心があるということがわかると思います。宗教的な関心はあるわけですが、ダーウィンは生物学にも素人ではあっても、宗教学に劣らない強い関心をもち、それから、経済学にも強い関心をもっていたのです。こういうふうな、一見、意想外と思われる結びつきがなかったら、おそらく進化論という考えは生まれなかったらうと思ひます。

多分、コンピューターの働きと人間の頭の働きとが非常に違う理由はその辺にあるのでありまして、コンピューターは人間が外から何かを与えてやる他しようがないわけですから、コンピューターの中に、生物学と宗教学と経済学に関する知識を詰め込んでみようと思っても、これはなかなかできないわけでありまして、またそういう組み合わせ以外の組み合わせから、全く新しい別の創造的な才能が生まれるという可能性が人間にはあるわけです。いわば人間のつくりだすものは、どういうところからくるかは、そう簡単に予見はできないけれども、コンピューターの場合には完全に外側からわかるという形でないで、何にも与えることはできないわけです。おそらく、基本的に変わっている点は、その辺にあるのではないかと私たちは思うわけです。

こういう人間的な関心を豊富に発展させる時期として幼児期というものが、あるいは一番大切な時期ではないかと思っているわけです。そこに非常に大切なしっかりした土台というものがいくつか築かれれば、おそらく、外側から無理矢理教えなくても、そういうものが自然であるかのごとく、いろいろな方向に、それぞれ、伸び育っていくという可能性、いつか、実を結ぶのではないかと考えられるわけでありまして。これは、おとなというものには、利害関係というものが主になっていて、そういうものに基づいてしか、何かを学んだり、勉強したりしようとしらないものですが、多くの日常のおとなの行動というものを考えてみれば、利

害のようなものに、一番左右されやすいということは、事実であります。そして、今すぐ自分の役に立ったり、お金もうけにならなければいけないことは、ごく普通ですけれど、これだけでは困るというのが私の考えです。

つまり、何かをすることがうれしいから、それをするのが、唯、うれしいから、他に報酬を求めないで何かを学びとったり、何かをやりたいという気持が、人間にとって一番大切なような気もするのですけれども、それは利害関係への関心の非常にうすい幼児期に、一番つくられやすいのではないかと考えられます。

それには、偶然というものもあるのでしょうかけれども、たとえば、生化学者で世界的な業績をあげている江波不二夫先生の話を知ったことがあるのですけれども、生化学を自分がやるようになったのは、小さい時に犬に噛みつかれて狂犬病の予防注射をされたから、そういうことに興味をもったのだと言われておりまして、案外、そういう偶然な事件も小さい時であれば、何か人間の一生を左右するものになりかねないと私たちは考えるわけです。

最近の発達心理学の動向

ここまでは、前置きでしたが、それでは、発達心理学というものが、それに対してどんな寄与をなしているかということですが、二番目に発達心理学の考え方の変化、あるいは、最近の発達心理

学の動向について、少しお話ししたいと思います。

今、最初に申し上げましたような、教育の高度化という社会的な情勢の変化に伴いまして、発達心理学も世界各国で急激な変化をとげつつあるようです。

これは、私たちが考えても、非常に意外だと思う位、ここ十年間位の間に、非常に目覚ましく変わったわけであり、最初に述べましたように、発達心理学などは、心理学の本道にとつては、脇道だと思われていたのが、わずか、十年かそこら前の話にすぎないと思うのですが、現在では、むしろ、発達心理学は、心理学の一番中心的な本道だという考え方が芽生えてきている位です。そういう動向の変化がどういう点に現われているかということですが、いくつかに、分けて、それを述べていきたいと思います。

一、教育が発達におよぼす影響の重視

まず、第一に、古い発達心理学の傾向では、これも最初に述べましたように、いわば、成熟とか、遺伝とかいうことが非常に大事だと考えられておりまして、人間の子どもの生長というのは、木や草のように自然に手をかけなくてもどんどん伸び育っていくものだと、無理をしないで教育する方が大事だという考え方が強かったと思うのですが、ここ五、六年の間にちょうど反対の考え方がだんだんできてきたように思います。つまり、人間

の生長のためには、学習とか環境とか、子どもをとりまわっている文化、社会の影響が非常に大きいのであって、特に教育の影響は無視できないという考え方がだんだん強くなってきたように思います。

皆さまよくご存知のように、フランスの心理学者、ピアジェはこういうことを主張しておりますし、ソ連の心理学者も同じであります。あるいは、アメリカでも、日本でも同じような考え方もつ心理学者が、どんどん増えております。

昨年、現在のアメリカで代表的な発達心理学者の一人であるブルナーが「教授理論の建設」という本を書きまして、その中で、非常におもしろいことを述べています。子どもの成長のためには、教授の理論とか、知識や思考についての理論が非常に大切で、これらを無視して発達をあつかうことは、できないと言っています。たまたま、ちょうど同じ時期に、ソ連のレオンチュエフという心理学者が、認識の心理学という本を書きまして、それを読んで、ブルナーの本と同じようなことを、ほとんど同じような言葉で述べている箇所がありまして、非常に私は興味をもったわけです。その後でまた波多野完治先生が心理学と教育実践という本をおだしになり、それを読みますと、また同じようなことを書いてあるのがわかりました。

別に、三人が相談して書いたわけではないのですが、期せずして、同じような表現が世界各国の心理学者の中からでてくる

というところが非常に注目される場所ではないでしょうか。

その意味で必ずしもそれが現在の主流とは言えませんが、これから支配的になりつつある傾向だと考えられるかもしれません。

二、発達のプロセスやメカニズムに関する研究の進歩

二番目に、こういう変化に伴って、発達のプロセスとかメカニズム、つまり発達はどういうふうに進行的なのか、それはどういう条件、原因に支えられているのかについて、細かい分析が非常に進んできたことを申し上げたいと思います。

そして、今まで、なぜ子どもは木や草と同じように自然に育つと思われていたかということがだんだん明らかになってきたわけでありまして、考えようによっては、木や草も別に自然に育つものではなくて、やはり日光や水や肥料とかいろいろなもの影響をうけて育つのですが、われわれが外に自然に育っている木を見る時には、そういう木の生長を支えている原因とか条件とかは、つい、うっかり見すごしがちです。なんにもしなくても、木や草は育つと思いがちなのです。

子どもの発達についてもやはり同じことが言えると思います。つまり、私たちはこういうふう子どもを育てようとは思っていないのですけれど、思っていないで何か手をかけているわけで、それが子どもの成長に何か非常に大きな影響を及ぼしている

ということが、だんだんわかってまいりました。

たとえば、ホスピタリズムというものが、施設病と訳されておりますが、乳児院や保育園のような施設にいる乳児の発達や成長が非常に遅れる現象をさしております。あるいは、初めは死亡率が非常に高いことから、注目されるようになったわけでした、ひどい時には、七十パーセントから八十パーセントもの施設の子どもたちが死んでしまうという高い死亡率が一時、欧米の乳児院で示されたことがあったわけでした。

この原因というのは、いろいろな追求されて、医学的看護が十分でないためなんだろうといわれたわけなのですけれども、いくら医学的設備を完全にしても、それを防ぐことができないということがわかってまいりました。意外なことには、ホスピタリズム、子どもの死亡率の高さや、発達の遅滞を起こす原因は、実際は、親身の保育者みたいな人間がいらない（親子関係という名で呼んでいる場合が最近が多いわけですが）子どもを育てる親身な母親または母代りの人がいないということが、非常に大きな原因であることが、やっとわかってまいりました。

たとえば、非常に有名な研究は、アメリカのスピッツの研究でして、彼は子どもたちを三つのグループに分けて、その子どもたちの発達をどんどん追跡したわけでした。

第一のグループは、普通の家庭児を百人、第二のグループは、非常に医学的に完備した乳児院の子どもを百人とります。ただ

し、この乳児院では、子どもの養育にあたる看護婦さんは子ども十人に一人の割合ぐらいしかいない。

第三のグループでは、医学的設備は、非常に悪いのでありまして、女囚を収容している刑務所付属の乳児院なのですが、ここでは母親が自分の子どもをみているわけです。たまたま孤児になった場合、人の子どもを預かることはあるが、だいたい、平均して母親一人が自分の子ども二人をみるのできる乳児院でした。

ここで育ったそれぞれ百人の子どもたちを何年か追跡したところ、驚くべきことに、第一のグループは、もちろんすくすく育ったのですけれども、第二群の子どもたちは非常に死亡率が高くて発達が遅れていました。そして、第三群の物質的にも社会的にも非常によくないと思われていた乳児院の百人も普通の家庭児と同じように、大変健全に育ったということがわかりました。結局、最大の原因は物質的設備でも、医学的看護でもなくて、子どもに対する親身な養育の程度に帰着するのであらうということが、だんだんわかってきたわけです。この発達遅滞というものは非常に著しく、だいたい五歳までに残った子どもは二十人以下だけであり、その子どもたちの発達は非常に遅れていて、言葉を一語か二語しかしゃべれないほどでした。スプーンを使って食事を取ることや、衣服を着たり脱いだりすることもできないわけです。

こんな状態に子どもがなってしまったことは、非常に不幸なことでありますが、その原因が、意外に、母親が子どもにも与える

世話の程度にあったわけですから、なかなか気づかれなかったわけです。

母親が、まさにこういうことをやらなければ、子どもは育たないので、一生懸命義務的に育てているのであったら、すぐ気づかれたと思うのですけれど、そうではなく、母親はごく普通の自然のこととしてやっていたために、それが気づかれなかったと言えます。

そして、何故ホスピタリズムが起るのかということが、細かいメカニズムの分析によって、わかってきたわけですが、一つの例はアメリカのウィスコンシン大学のハローによっておこなわれた猿についての非常におもしろい研究です。

猿を離乳した直後に二つの仮親につけるわけです。一つは針金製のかごに哺乳びんがつけてあり、片方には哺乳びんがないけれども骨組を手ざわりのいいフェルトでおおってある仮親を使うわけです。我々の常識では針金の方が乳を出してくれるのだから、針金の方に猿がなつくと思われれますが、事実は全く逆でした。猿の子どもは、次第にフェルトの母親の方にしがみつくことが多くなり、それだけであつたなら、手触りのいいほうが好きだからしがみついているとみるのですが、どうも、それだけではないらしいのです。たとえば、猿の嫌いなへびやねずみをおりの中に入れて、猿の子どもは、針金の母親がいても非常に恐がってなきわめいてすくんでしまうのです。ちょうどホスピタリズムの子ども

と同じように床にうずくまってしまい、ただ体を左右にゆるする運動をしたのですが、フェルトの母親の場合には、猿の子どもは恐いものが近づいても、すぐに母親にしがみつけば、恐がらないように見えたわけです。

もう一つのおもしろい例は、ハーローが何か月か後にフェルトの母親に顔を描いてやったところ、猿はどうしても顔の描いてある方にはしがみつこうとせず、無理にしがみつかせようとすると、わざわざ反対のほうに向きをかえて、顔の描いてない背なかの方にしがみつこうとすることがわかりました。

猿と人間を比較してみると、こういう行動は大変人間的なニュアンスを残しており、ただ乳をだすとか世話をしてくれるとかいう功利的動機だけで、子どもは母親になつくのではないということを我々に想像させます。もともととて深い、いろいろな要素が親子関係の中に入っていると考えられます。

次に好奇心について別の例をあげますが、好奇心は子どもの知的成長のために非常に大切だと考えられており、今までの心理学では好奇心は自然に子どもの中に育つものであり、外側からはどうすることもできないという考え方が強かったのですが、だんだんそうではないだろうという考え方がでてきました。たとえば、カナダの発達心理学者のヘップは、好奇心は非常に見慣れたものからほんのわずか違うものに対して起こり、非常に見慣れたものから非常に違うものに対しては我々は恐怖をもつという考え方を

述べています。

こういうふうになると、お医者さんの家庭から、よくお医者さんがでるということは、今までの常識では、遺伝的に医学を学ぶ才能があるとか、お医者さんは儲かるからお医者さんになるのだらうという考えが強かったわけですが、そうではないと考えられるわけです。普通のサラリーマンの家庭では、父親がどんなことをやっているかを具体的に見ることはないの、子どもは父親と見ている存在だというふうに思っているわけですが、お医者さんとか、音楽家、画家という職業の場合には、家庭で父親はさまざまな具体的な仕事をしているわけだから、父親の仕事の内容はだんだん子どもにわかってくるわけです。それが見慣れたものになり、たとえば、「人間の命を救うという社会的使命とはどういうことか」とか、「生物についてのいろいろなことを学ぶということとはどういうことか」とか、という方向に自然に子どもの関心が発達してくると考えられます。これは、一旦はずみがつけば、今の考え方を応用すれば、どんどん伸びていくわけです。

児童相談をしていると、よく家の子どもはちらかしてばかりいて困るという相談があるのですが、私はその時、「それでは、お宅ではお父さん、お母さんがよく片付けをなさいますか」と聞くことにしています。そうすると、「私は、まあ、片付けるのですが、主人の方が会社から帰ると洋服を一つずつ取り出しながら歩

「お母さん、お話を聞いています」というような例をお話になるお母さんがいます。その子どもにとっては、乱雑しているところを見慣れているのだから、乱雑にしているのが普通で、きちんとしている世界は逆に気持ちのわるい世界になっていることがわかります。

そこで、私は、「子どもをお話したいなら、まず、ご主人をおしなさい」と、いうわけですが、たいていのお母さんは、「それは、どうもできません」という答えをします。「それなら、無理に子どもだけをなおそうとせず、こせこせ育てないのもよいことだと思えば、それもよいじゃありませんか」といいますと、たいていのお母さん方は不平そうな顔をなさいますが、私たち心理学者が教えることのできることに反対の条件がそろっているのですからどうにもなりません。

今まで、いろいろな例をあげましたように、自然の成長というもの、どういう条件や原因によって支えられているのかの分析が進んできたわけです。特に大事なことは、社会的学習という考え方で、子どもというものは、母親、父親、先生など、自分の規範となるような人物の行動を、いつのまにか、学習するものだという考え方は、先生方の日常の行動は、教えようと思わなくても、いつのまにか、子どもたちにしみこんでいっているという考え方が強くなっています。

三、初期学習の重視

三番目に、発達心理学の傾向の変化として、初期学習の重視があげられます。フロイドの精神分析では五歳までに人間の性格の基礎ができあがるという考え方をしていますが、この考え方ももう少し広がったものです。つまり、同じことを学ぶのに、おとなになってから学ぶのと発達の初期において学ぶのでは学び方の質が違ふという考え方がだんだん強くなったわけですから。それを私たちは初期学習と呼んでいます。ホスピタリズムの例を書きましたように、初期における母親、あるいは保育者などによるまわりからのいろいろな働きかけが欠如したために起きた障害は、それを後になって回復させることが非常にむずかしくなります。ホスピタリズムの子どもは非常に言語発達が遅れるのですが、これを回復させようという実験は世界各国の心理学者がやっていますが、大変な苦勞と、大変な手数をかけても、完全になおすことはなかなかむずかしいのです。

言語を学ぶことは、人生のいつに学んでもよきそうに思えますが、必ずしもそうではなく、ある時期に学ぶということが必要であり、その時期をはずしてしまうと、同じことを同じように教えるても非常に効果が悪くなってしまうのです。

言語の発達以外にもいろいろな例がありますが、ハーローの実験でフェルトの母親について育った猿においては、おとなになっ

ても正常な性的行動をおこなうことができないことが発見されました。なぜそうなったかという原因は、まだわかっていないのですが、この性的に異常な猿は後で、欠陥をとりかえすことはできませんでした。猿の母親が、おそらく子どもに与えているしつけというようなものが、猿の中に案外大事ないろいろなものを育てているのだらうと思います。ですからフェルトの母親も残念ながら十分な母親にはなれなかったわけです。

このように、いろいろな方面にわたって、初期の学習が非常に大切であり、時期をはずすことは非常に危険な結果を後に残しかねないという事実がたくさん知られてきました。もちろん、これを絶対的と考えてはならないので、フロイドの宿命論には、あまり賛成できませんが、私たちがなんとかして障害をなおそうとして、非常な努力と手間をかけ、専門的教育を与えても、なかなか元のようにもどしえないことが多いのです。

四、知的学習の重視

四番目に、知的学習というものが、だんだん発達心理学の中で重視されるようになってきたことをあげようと思います。今まで、非常に小さい子どもは何もわからないから、知的なことを教えても何の役にもたつまいと考えられてきましたが、だんだんそうではないという考えが強くなってきました。どんな小さな段階

でも、それなりにいろいろなことを考えたり学んだりするのであって、幼児の場合もそれを無視することはできないという考えです。今まで、幼児期は性格形成や社会性を養う上で重要だと考えられてきましたが、現代の心理学者は、その他に、知的な学習も幼児期には大切だと考えるようになっていきます。

たとえば、アメリカのブルナーたちがアフリカのコンゴでやったおもしろい実験があります。未開地で、昔ながらの原始林に住んでいて学校へ行かない原住民の子どもと、原始林に住んでいるけれど学校へ行っている子どもと、それから都会に住んで学校へ行っている原住民の子どもとの三つのグループについて比較研究がおこなわれました。

そして、原始林に住んで学校に行かない子どもの中には非常に原始的な思考様式が、そのまま残っていることがわかりました。実験者がびんからコップに水を移し、「コップの水の丈が高くなったのはなぜか」と聞くと、「実験者が魔術をつかったから」と答えるのです。このように原始的思考様式を、原始林に住んでいても学校に行っている子どもたちは、都会に住んでいる子どもたちと同じようにもっていませんでした。

ここでわかることは、そういうアフリカの子どももっている未開の原始的思考様式というものは、学校に子どもたちを入れて、一定の知的学習のかまえを植えつけることによって、比較的簡単に、克服することができるということです。しかも、学校へ

行けばどんどん知的な成長が高まっていくというデータと、学校に行かない子どもたちは、七、八歳で知的な伸びはとまってしまい、何歳になっても、ある一定の原始的思考の段階にとどまっているというデータも得られました。そういうことを考えますと、やはり、七、八歳以前に学校教育を受けることが幼稚な思考様式を克服するために非常に大切だということができます。

ブルナーという人は非常に大胆な提言をしています。それは、どんな発達段階のどんな子どもに対しても知的な素材をその本質をくずさずに教えることができるということです。それに基づいて、ブルナーは代数の計算のようなものを小学校に入ったらばかりの子に図に書くような教え方をつかってある程度成功したと報告しています。

そのように、どんな段階にも教育の可能性があるとというブルナーのいい方を無制限に拡張してよいものかどうか私には非常に疑問があるのですが、今までの考え方と反対であるブルナーの考え方には注目すべきものがあると思います。ある成長段階まできた時に、はじめて何かができるようになるということではなく、こちらからの働きかけというものは、もっと小さい年齢までいくらでも降ろしていけるといふ可能性を信じなければいけないというブルナーの信念は、教育者としては大切なものではないだろうかと思えます。

以上のような発達心理学の動向から、幼児教育はきわめて大切

な教育の場であると考えられてきます。特に、おとなになってからの、それ以後の学校教育の場よりも、もっと効率の高い、もっと意外な成果をあげられる場であるという考えがでてきます。幼児教育は学校教育と違って、発達の全分野にわたってさまざまな教育がおこなわれねばなりません。

幼児教育の現状と私の考え

しめくくりとして、幼児教育の現状について私の考えを述べたいと思います。知的な教育とは何かということに対する日本の幼児教育の考え方は誤っていたのではないかと私は思います。知的な認識とは何もむずかしいことを考えることではなく、人間的な、その子にとっての本当の意味での関心が正しく育つということが、まず何よりも大切な条件です。そのためには詰め込みではなく子どもが知らず知らず与えられている環境的条件の中から何かを自発的に受け取り、自発的に自分の中で何かを伸ばそうとする根を持っていくことが一番大切です。

好奇心、知的関心はどういうふうにして伸びるかということとは先ほど述べましたが、幼児の知的な成長にとって一番大事なことは、むずかしいことを教えることではなくて、幼児教育にあたる者、父親、母親、先生が人間的に豊かであり、正しいということが何より必要なことだと思います。ですから、子どもの教育の第

一步は親や先生の自己教育だと言えます。何も百点満点の親や先生になることではなく、たとえば、どこかに父親として、「あつ、父親も良いところをもってゐるな」と子どもに思わせるものが、ひとつでもあればそれでいいのだからと思います。

こういうことが私の考えの基礎にあるわけなのですが、それからみて、今日の家庭では知的な教育というのが大変、間違つて考えられていて、今の私の考えとむしろ正反対のことが考えられている場合が多いようです。

ある時私に相談にきたお母さんは、うちの子どもは、知能検査の練習をさせてもちつともやらないで、家の雨どいに非常に興味をもちだして、しょっちゅう、雨どいというのは、どっからきて、どこへ行くのか、あれはどういうことをするんだとうるさくしてしょうがないと話されました。私はその時、子どもが疑問をもつのは非常に良いことで大切なことだと思つてお話ししたのですが、よく我々は誤解して、疑問をもつことは子どもが何にも知らないからだと思いがちです。しかし、本当は、子どもは、あることを知り始めたから疑問をもつわけです。母親が子どもの疑問を適切につかまえて、適切なヒントを与えることが知的な教育であり、子どもが疑問をもつた時に、その疑問を大切に、押しつけるに教えたり、強制的に棒暗記させたりして、子どもにとつて、知識が負担にしかならないようにしてはなりません。

つまり、幼児の知的成長力にとって大事なことは、子どもの疑

問を踏台にして、そのわずか上であるような適切なヒントを与えてやることによって、子どものそれまでのさまざまな知識が、全く新しい認識をつくることができれば、おそらく子どもはものを学ぶおもしろさを覚えるわけです。そして、いちいち、おとなが教えてあげなくても、自発的にさまざまな疑問を自分で解こうという態度が子どもの中に育っていくのを期待することが、子どもの知的な成長のためには、一番大事であると私は考えます。

そこから見れば、雨どいについて興味をもつたということは大変よいことで、子どもが家の構造や雨どいの構造やはたらきについて考え、疑問をもち始めたと思われるのですから、知能検査の練習より、ずっと大切なことだと言えます。家の子どもは食事のしつけがよくできないから、幼稚園でそれをなおして欲しいという例がたくさんありますが、本末転倒もはなはだしいわけで、いたずらに、学校教育の先取りをしようとするよりも、こういうしつけとか人格形成が家庭教育では大切なことだと思えます。

このようなことを、私たちは、発達心理学をやりながら自然に考えるわけです。幼児は無限の可能性を秘めているのですから、これからの幼児教育は、あるいは最もやりがいのある未知の領域の探検という魅力を備えているのではないかと思えます。そういうことのために私たちの知識が現場の先生方に役立つものであれば非常に嬉しく思う次第です。

(お茶の水女子大学)

(幼稚園教育実務指導研究会での講演より)

幼児のあそび

— 児童臨床学の応用 —

大戸美也子



問題

子どもにとって、あそびと遊具は不可欠な存在のようである。

あそびの定義や本質が論議され、保育におけるあそびの形態や時間が問題にされ、遊具の種類や数や扱い方に真剣な配慮がはられるのも、あそびと遊具が子どもの世界に深く根をおろし、活用されているからに他ならない。

「人間のことにほんとうに精通した人の、落ちついた、透徹した眼¹」は、幼稚園のそもそものはじめから、遊戯と恩物を保育の中心に据えてきたし、その後これらの内容が一層子どもにふさわしく変化し発展してきたものの、幼児の世界においてその地位の揺らぐことはなかった。このことはまた、あそびと遊具が人間

(または人間であること)にとっても不可欠な存在であることを意味するものである。幼児は「そのはじめから養護し養育することによって、われわれの文化社会に参加して生活することができるようなパーソナリティーに作られている」²のである。

だから、養護する者とされる者の間に意志の疎通がなければ、幼児はたった一人の小さな異邦人と化し、生きていくことすら困難となるだろう。「児童が児童であるとともに、成人する」³ことができるのも、子どもと成人の間にあそびという共通理解の場があり、遊具という共通語を持ち得たからではなからうか。

ここに、あそびと遊具が人間にとって必要とする第一の理由がある。次に、人間の初期経験を重視する立場からもあそびと遊具を必要とする理由があげられる。人の成長や発達、ひとつの段階から次の段階へ積み重なっていく過程であり、それぞれの発達

課題はそれに先立つ経験に依存するといわれている。したがって、人間の子どもがよい出発をすることはきわめて大切なことといえよう。そして「子どもが子どもらしく遊びながら、子どもであること」をのりこえていく⁴ 事実を見逃してはならない。子どもが、今日あそびの中で充実した時間をすごすことが、明日への最善の備えとなっているのである。

また、人生の初期の段階にたそびと遊具を必要とする理由として、ローレンス・フランクは次のような指摘をしている。

「幼児は、精神衛生からみても負担のかかる試行錯誤を行なっている時期であるから、困難や葛藤につき当たった時助けになるような『教育的治療』が必要である。それはちょうど、前線のかげで精神的あるいは情緒的な戦傷者を扱うように⁵ 子どもは、全く自発的にあそびの中で成長の傷の痛みを癒しているのである。

このような理由から、子どもにとつてのたそびの問題が、人間（または人間であること）にかかわってくるといえよう。これは、あそびの単なる拡大解釈というよりは、むしろ、子どもとじかに接する人の次のような役割を認識する時その前提となる考えに依存しているのである。

我々は、子どものあそびを通して対話し、行動の意味と可能性を理解し、さらに可能性を伸ばす方策を考え実践に移さなければならぬ。これはちょうど、診断だけにとどまらず診断「即」治

療を基本とする児童臨床家の立場と共通するものであり、我々が児童臨床家としての役割を担っていることを意味している。

このような役割に気づき「子どもの今ある状況は、発展可能態として、今の社会の変革を推進させるだけでなく、明日の社会における発展創造態としての役割を果たす」という児童観に立つ時、子どもの問題が人間の問題として係りをもってくるのである。

子どもと接する者の新たな役割（児童臨床家）と、そこでの学問（児童臨床学）の成果は幼稚園の中にとり入れられるべき価値のあるものである。

例えば、ジノットによれば、遊具は子どもが自分の情緒的欲求を投影すると同時に、それによって行動を助長する働きのある二つの側面を有するものであり、したがって遊具を慎重に選択すれば、治療家はその場面に内在する可能性を洞察することが可能であるとして、遊戯療法に効果のある遊具と用具の選択に関して理論的な枠組を作る試みをしている。

この提案は、幼稚園の中にも、保育効果をあげるための保育技術や教材の研究の外に、保育場面の研究や、あそびを進展させる遊具の理論的研究のあることを示唆するものであるといえよう。そこで、これらの研究の成果をふまえて行なった保育場面に関する実験研究を次に紹介してみよう。

研究

○ねらい

保育室で使用頻度の高い遊具または用具七個を選び、遊具の配置差から三つの保育場面を設定し、一定時間子どもをその中で自由に活動させることにより、場面に内在する可能性を

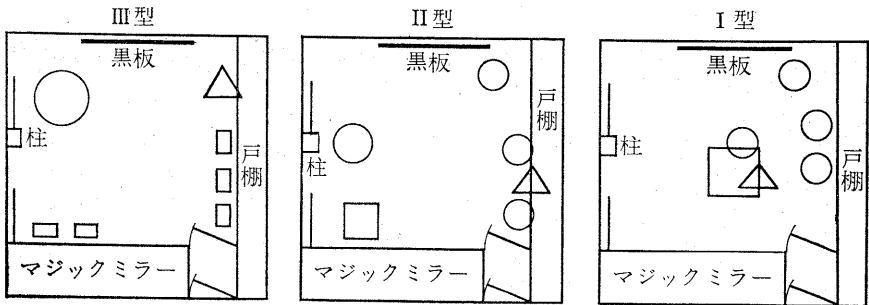
(1) 物（遊具）の操作の側面と

(2) 対人関係の変化の側面

とから明らかにし、実際の保育に役立てることをねらいとした。

○実験計画

保育観察室（74 m²、南側…ベランダへ開放、北側…戸棚、東側…マジックミラー、西側…黒板・壁、絨毯敷）において大型箱積木一式、ママゴトセット一式（フレール館製）、ヤギ（半隻）一枚、人形三個、椅子二脚、絵本十数冊の遊具または用具について、I、II、IIIの三つの配置差による場面設定をした。□は、積木、○はママゴト道具、△は絵本、I型は箱積木において、集合化を誘発するよう分散させ、しかも子どもの対物活動の自発性をそこなわないよう配置し、ママゴト遊具において核化を誘発するよう関係遊具を一か所に集めて配置し、絵本は比較的静かな場所に集めて配置したもので、全体としては積木が最も流動性の多い配置型である。（Iの図）



□積木 ○ママゴト道具 △絵本

II型は、箱積木において核化を誘発するよう一部作りかけにして配置し、ママゴト遊具については関係遊具を分散させしかも子どもの対物関係の自発性をそこなわないよう配置し、絵本はママゴト遊具と共に並列して配置したもので、全体としてはママゴト遊具が最も流動性をもった配置である。（IIの図）

III型は、箱積木において部屋中央へ入口側を解放的に、反対側を閉鎖的に積み上げて配置し、ママゴト遊具は関係遊具を比較的近距离に分散させて配置し、絵本は積木の間に配置したもので、全体としてはどの遊具も流動性をもった配置である。（IIIの図）

被験者は、耶山女子大学附

属幼稚園園児、年長組三クラス(89名)、年少組一クラス(21名)。記録者は、子ども一人について一人および各遊具について各一人の記録者がつく。観察時間、子どもの入室から各90分間。実験期日 昭和四十二年十月〜昭和四十三年一月の間の午前中。

○結果(その一)

あそび活動の記録をもとに、子どもの対物活動のあり方をみるため次の三つの角度から分析を行なった。

- ① 特定遊具(積木)に対する交渉のあり方Ⅱ対物活動
- ② 遊具の活用過程の変化
- ③ 遊具の選択に関する規準化

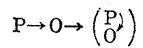
〈分析方法〉

①については、鈴木啓子の分析方法とお茶の水女子大児童集団研究会の「集団活動における物の特性と技法」を参考にした分析基準により、特定遊具に対する行動の動因を幼児(P)における要求と物(O)の特性との関係の中に求め、一分毎に行動を分析し整理した。



A 物が人の物に対する働きかけを規定する(例「積木にのる」「積木にこしかける」「積木からとびおろる」等の活動)

B 物が人の働きかけによって発現する機能・その変化の人の物に対する働きかけを規定する。(例箱積



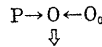
木でトンネルができ、それに誘発されるトンネルをくぐる活動、あるいは、そのトンネルくぐりに誘発されて起こるトンネルを拡大する活動)



C 物が人の働きかけによって発現する機能・その変化に誘われて人の物に対する働きかけを規定する。



(例 他の子どもが作ったトータムタワーに誘発されて、椅子に使っていた積木を怪獣に変え、そのトータムタワーにおそいかかる活動)



D 物が人の働きかけによって発現する変化にさそわれて別の物が加わることによって新しい活動が創造される。(例 トータムタワーをおそった怪獣も加えてさらに高く積木をつみ、神様を作る活動)



E 直接PとOとの交渉はないが、物がそこに存在することによって新しい活動を用意する。(例ピアノをひく台として使っていた積木がそのままになっていたものを次にスベリ台として使うまでの活動)

②については、遊具別に、遊具が活用されている、間接的に活用される、創造的に活用されている、の三つの活用形態を图示し時間を追って整理した。また③については、ママゴトあそびの遊具五つについてその結合状態を②の図に加えて現わした。

〈分析結果〉

①の結果は(表-1)に、②、③の結果は(図-1)に見られる通りである。

1、対物活動と配置差との関係

・基準A、遊具に規定される活動は、Ⅲ、Ⅰ、Ⅱ型の順に多い。
 ・基準Bは、Ⅰ型で、基準CはⅢ型、基準EはⅡ型でそれぞれ多い。
 ・このことから、積木を配置する際には次のような留意が必要である。

ある。

- ・行動が変化するため、一人でも楽しめる配置Ⅲ型、他人がいつしよの方が比較的楽しめる配置Ⅱ型に留意する。
- ・作りかけにしておくこと(Ⅰ型)は、子どもの活動領域を固定化させるが、それを使ってのあそびを規制する傾向がある。

2、遊具の活用過程の変化

・いずれの遊具においてもⅢ型、Ⅱ型、Ⅰ型、の順に活用の分化が起こる。中でも、積木と絵本において顕著である。

・活動開始後、30分から40分にかけて、物の活用が活発になり、積木の移動や創造的活用あるいはママゴト遊具の結合が起こる。

(注、新しい場面に入って30分から40分の行動には場からの規定

(表-1) 対物活動と配置差との関係

| 対物活動の類型 | 配置型 | I | II | III | | 合計 |
|---------|---|----|----|-----|-----|-----|
| | | | | 年長児 | 年少児 | |
| A | $O \rightarrow (P_0)$ | 41 | 33 | 61 | 54 | 189 |
| B | $P \rightarrow O \rightarrow (P_0)$ | 17 | 3 | 10 | 14 | 44 |
| C | $(P_0) \rightarrow (P_0)$ | 9 | 3 | 14 | 6 | 32 |
| D | $\bar{P} \rightarrow O \leftarrow O$ ↓ | 4 | 3 | 5 | 1 | 13 |
| E | $P \neq O \rightarrow$ | 19 | 48 | 0 | 15 | 82 |
| 計 | | 90 | 90 | 90 | 90 | 360 |

性の強い、試し行動”や”くり返し行動”が多く見られる。これは、次の主体的活動の前提となる単なる試行錯誤ではつまされない重要な活動と思われる、今後の検討が必要である)このことから、幼稚園の朝の30分から40分間のプラブラ活動または探索活動の中に、一日の保育過程を充実させる活動が内在しているといえよう。

3、遊具の選択に関する規準化の傾向

五つのママゴト遊具間の結合状態から遊具の取捨選択に関する規準化の傾向をみ見うとした。

・サークル中心型 初めにサークルを広げ、次にママゴトセット

(図一)

特定遊具の活用過程

| 経過時間 | 積木あそび | | | | ままごとあそび | | | | 絵本 | | | | | | | | |
|------|------------------------|-----------|---------------------------|-------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------|-------|-------|-------|--|--|--|--|--|
| | I | II | III | | I | II | III | | I | II | III | | | | | | |
| | 5歳10ヵ月 | 6歳3ヵ月 | 6歳8ヵ月 | 5歳4ヵ月 | 5歳10ヵ月 | 6歳3ヵ月 | 6歳8ヵ月 | 5歳4ヵ月 | 5歳10ヵ月 | 6歳3ヵ月 | 6歳8ヵ月 | 5歳4ヵ月 | | | | | |
| 10分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20分 | | コーナール | | | | | | | | | | | | | | | |
| 30分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 40分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 50分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 60分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 70分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 80分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 90分 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | ママゴトのサークル 神様と木のサークル | ママゴト内ママゴト | 粘土の積木 三屋角積木 粘土のお菓子や | 飛行機 書く台 家く台 食卓 | ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト | ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト | ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト | ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト ママゴト | | | | | | | | | |

記号説明 ————— 活用されている
 - - - - - 間接的に活用されている
 ~~~~~ 創造的活用  
 ~~~~~ 二つの遊具間の結合  
 <-----> これより活用開始

を加え、人形、ゴザを経過をおってとり入れていく型(Ⅲ型)年長児)

・ゴザ中心型 初めにゴザを広げ次にサークル、ママゴトセットを加えていく型(Ⅰ型)

・サークル、ゴザ分立型 サークルを中心とするものとゴザを中心とするもののママゴトあそびが並立して起こる型(Ⅲ型年少児)

このことから、ままごとあそびにおいては、ゴザ・サークルにより場または領域が先に決められ、次にママゴトセットが選ばれ、さらに年長児は積木、年少児は人形との結合関係が行なわれるようである。しかし、ままごとあそびが経過とともに分化する場合はむしろ、ママゴトセットのみをもって移動し、その後サークルがはこばれるという事例も見られた。したがって、先の三つの型は、あそび開始時に見られる規準化の傾向と限った方が妥当かも知れない。

引用文献

- 1、フレール著 荒井武訳「人間の教育」上72 P (岩波書店 昭和39年)
- 2、ローレンス・フランク著 津守真訳「はじめなければ終りよし」(「幼児の教育」第66巻第8号)
- 3、松村康平編「児童理解の方法」(誠信書房 昭和33年)

4、松村康平著「こどもとおもちや」(ヘビーブック4 中央公論社 昭和35年)

5、Lawrence, K. Frank & others "Understanding Children's Play" (Columbia University Press. 1952)

6、松村康平著「研究室での研究と現場での研究」(「幼児の教育」第59巻第1号)

7、ジノット著 中村悦子訳「児童集団心理療法」第5章(新書館 昭和40年)

8、3に同じ

9、松村康平監・編「児童臨床学」児童臨床の関係弁証法 38頁(40頁(昭和43年) (郡山女子大学)

倉橋惣三選集全四巻発売中

- 第一巻 ☆幼稚園真諦
☆子供讃歌
☆フレール
- 第二巻 ☆幼稚園雑草
- 第三巻 ☆育ての心
☆就学前の教育
- 第四巻 ☆保育案
☆初期の著作

など、第一巻～第三巻以外の、かつての単行本としてまとめられなかった珠玉の論文、随筆、揮毫。

B6判・特製本
各巻定価700円 発行フレール館

幼児の環境と遊びについて



寛田知義
瀧本和子
並河信子

一、幼児の環境と遊びの調査

社会では、さまざまなものが急激に変化しているといわれている。確かに、十年前や二十年前の生活条件や生活様式と現在のものとは比較してみると、随分変わっている。政治や経済の条件から、個人の生活観から生活様式などの変化は著しい。それ故、子どもの生活様式も変わりつつあると考えてみていいであろう。

そこで、私たちはこの子どもの生活の変化を、子どもの生活環境から具体的に把握してみたいと考えたのである。その方法として、子どもの生活のなかで、重要な部分をしめ、子どもの生活をよく反映させていると考えられる「遊び」を通して検討することを試みたのである。さらに、生活の変化のてがかりの一つとして「都市化」ということを考えて、都市と農村を比較して検討する

ことにしたのである。

そこで、子どもの遊びについて、1、遊び場所、2、遊びの種類、3、遊具、4、遊び相手、に分けて、西日本各地で幼稚園、保育所在所児を対象として、質問紙法によって、幼児の保護者に記入してもらって検討することにした。調査人数は、回収されたもののうちで処理された数として第1表をあげた。調査地域は大都市の大阪市・神戸市、大都市周辺地域として団地居住の豊中市・池田市、地方中都市として富山市・高知市、農村地域として姫路市の農村地域を選んだ。なお、今回の報告は紙数の関係から、「遊び相手」を除く、三項目の一部について述べることにした。また、この調査の地域の選択や遊びの種類、遊具の項目の選択を結果処理の都合上で局限したために問題を残したことを附記する。調査は昭和四十二年十月下旬に実施したものである。

第1表 調査対象

| 地域 | 男子 (名) | 女子 (名) | 男女総計 (名) |
|--------|-----------|-----------|-------------|
| 富山市 | 332 | 336 | 668 |
| 高知市 | 172 | 162 | 334 |
| 姫路市 | 481 | 434 | 195 |
| 豊中・池田市 | 102 | 98 | 200 |
| 神戸市 | 275 | 227 | 502 |
| 大阪市 | 344 | 367 | 711 |
| 総計 | 1706 | 1624 | 3330 |

二、遊び場について

調査方法 前述の如く、遊びに関しては、遊び場所・遊びの内容および遊具について、一連の質問紙を製作し、幼稚園・保育所など施設を通して母親に記入を依頼した。遊びに関しては、(1)近くの公園・広場(2)近くの道路や空地(3)自分の家の庭、またはよその家の庭(4)アパートの屋上(5)自分の家の中(6)よその家の中の六種とし、非常によく遊ぶ、ときどき遊ぶ、遊ばないの三段階とした。

結果とその考察、遊び場の調査結果は、男女それぞれに地域別に分類し、六種の遊び場を(1)非常によく遊ぶ、(2)ときどき遊ぶ、(3)ほとんど遊ばないの三段階としたがその一覧表が第2表である。この表に準じて述べると、非常によく遊ぶ場所は男女、各地域を通じて、自分の家の中で遊ぶものが最も多く、五四%(神戸・男)七六%(富山・女)にわたっている。この傾向は大阪を除き、女子により強い。次に多く遊ぶ場所である道路・空地、公

第2表 遊び場所

| | 大男(%) | 大阪女(%) | 神戸男(%) | 神戸女(%) | 豊中・池田男(%) | 豊中・池田女(%) | 姫路男(%) | 姫路女(%) |
|------------------------------|------------------------------|------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------------------|----------------------------|------------------------------|-------------------------------|
| 自分の家の中 (1) (2) (3) | 219(66) 110(33) 5(1) | 214(62) 120(35) 12(3) | 146(54) 120(44) 5(2) | 137(61) 86(38) 3(1) | 64(63) 37(37) 0(0) | 136(73) 26(27) 0(0) | 253(55) 206(44) 3(1) | 260(60) 158(37) 13(3) |
| 公園 (1) (2) (3) | 93(28) 179(53) 65(19) | 69(19) 190(54) 92(26) | 90(33) 141(53) 38(14) | 62(28) 108(48) 55(24) | 46(45) 41(40) 15(15) | 40(41) 34(35) 24(24) | 213(47) 162(35) 81(18) | 160(36) 174(39) 110(25) |
| 道路 (1) (2) (3) | 134(40) 128(38) 73(22) | 94(26) 169(48) 92(26) | 139(51) 96(34) 40(15) | 94(42) 97(44) 40(15) | 40(40) 41(42) 18(18) | 25(26) 38(39) 34(35) | 225(49) 186(41) 47(10) | 167(41) 185(45) 55(14) |
| その他 (1) (2) (3) | 106(33) 131(41) 84(26) | 112(33) 138(41) 90(26) | 77(30) 116(45) 66(25) | 78(35) 102(46) 66(25) | 42(42) 34(35) 23(23) | 48(51) 24(25) 23(24) | 240(53) 172(37) 44(10) | 214(51) 169(41) 34(8) |
| よその家 (1) (2) (3) | 65(19) 213(64) 57(17) | 75(22) 240(69) 33(9) | 37(14) 205(76) 27(10) | 44(20) 160(71) 27(10) | 23(23) 72(70) 7(7) | 18(18) 76(78) 4(4) | 33(7) 339(75) 82(18) | 61(15) 308(74) 45(11) |
| アパートの屋上 (1) (2) (3) | 13(4) 32(11) 255(85) | 39(12) 34(10) 254(78) | 4(2) 22(9) 221(89) | 6(3) 10(5) 184(92) | 0(0) 4(4) 90(96) | 2(2) 2(2) 85(96) | 11(3) 11(3) 356(94) | 4(1) 14(4) 319(95) |

(1) 非常によく遊ぶ (2) ときどき遊ぶ (3) ほとんど遊ばない

第2表 (つづき)

| | 高 | | 知 | | 富 | | 山 | |
|------|-------------------|-----------------------------|-----------------------------|------------------------------|------------------------------|------|------|------|
| | 男(%) | 女(%) | 男(%) | 女(%) | 男(%) | 女(%) | 男(%) | 女(%) |
| 自家の中 | (1) (2) (3) | 102(60) 65(38) 4(3) | 110(68) 48(29) 4(3) | 211(66) 104(33) 3(1) | 252(76) 73(24) 0(0) | | | |
| 公園 | (1) (2) (3) | 56(34) 78(47) 32(19) | 45(29) 80(52) 27(17) | 119(38) 135(43) 59(19) | 66(21) 156(50) 92(29) | | | |
| 道空 | (1) (2) (3) | 56(33) 81(48) 33(19) | 48(31) 79(52) 27(17) | 147(49) 106(36) 44(15) | 111(33) 157(47) 68(20) | | | |
| 自の庭 | (1) (2) (3) | 74(44) 82(48) 14(8) | 80(50) 73(47) 6(4) | 130(42) 136(44) 44(14) | 147(46) 140(43) 36(11) | | | |
| よ家 | (1) (2) (3) | 21(12) 127(76) 21(12) | 24(15) 120(73) 21(12) | 44(14) 240(74) 37(12) | 48(15) 243(75) 33(10) | | | |
| アパート | (1) (2) (3) | 5(4) 8(5) 136(91) | 2(1) 5(4) 128(95) | 4(1) 13(5) 246(94) | 2(1) 16(6) 268(73) | | | |

園・広場、自他の庭など男女および地域によって差がみられ、いずれも二位～四位を占めている。これらはそれぞれ記載者によって、地域によって、これらの場の用語に対する主観や解釈が異なっているのではないかと思うが、はっきりしたことは分からな
い。なお全般的にみて、姫路・高知は自他の庭で遊ぶことが、他の地域よりも多い。姫路は対象となった施設が農村地区に多いことが原因と思うが、他に比し、最も戸外の遊び場に恵まれているといえよう。順位五を占めるものはよその家の中で、大阪の女子

を除く、男女・全地域にわたっている。最も順位の低い場所、すなわち遊ばれていない場所は屋上である。

大阪の女子のみ、他の地域に比し屋上の使用が多いのは、住宅事情・交通事情など戸外の遊び場に恵まれず、一方公団住宅などが多いことが原因であろうか。全般に女子は男子より建物に属して遊びがちといえよう。

ときどき遊ぶ場所に関しては、よその家の中が最も多く、六四％(大阪・男)～七八％(豊中・女)(注・豊中は池田も含む、以下これに準ずる)となっている。公園・広場、自他の庭、道路・空地に関しては表にみられるごとく、地域・男女による差があり、概して二位～四位となっている。ときどき遊ぶ場所の下位は、前述の非常によく遊ぶ場所の下位と同じく、全地域・男女を通じて屋上であるが、大阪におけるその利用度は、男女とも他の地域よりたかい。

遊ばない場所は第2表の(3)に該当するが、全地域・男女を通じて屋上で七八％(大阪・女)より九六％(豊中・男女)となっている。次に遊ばない場所は、男子では表の如く地域によって異なり、女子は豊中を除いていずれも近くの公園・広場となっている。下位はいずれも自分の家の中となっている。この表を通してみると、非常によく遊ぶ場所の上位と、遊ばない場所の下位は一致しており、遊ばない場所の上位と、非常によく遊ぶ場所の下位

も一致している。

全般的に、姫路を除きいずれも戸外の遊び場に恵まれているとはいえない。交通および住宅事情など原因は多様に考えられるが、全身運動が必要な幼児期にこのような状態は検討を要する。

すなわち、幼稚園・保育所など、施設では環境の設定・カリキュラムの作製などに考慮を払いたい。至難に近いことであろうが、広い遊び場を備えるよう考慮する、筋肉運動のできる機会を多くつくるなどに留意したい。

三、遊びの内容について

調査方法 遊びの内容に関しては、幼児が遊ぶと思うものを83項目あげ、これも、よくする、ときどきする、ほとんどしないの三段階とした。これらの項目は幼稚園の教育内容である六領域と考え合わせて作製した。すなわち、83項目のうち(1)～(2)は健康、(3)～(4)は社会に、(4)～(6)は自然に、(6)～(7)は言語に、(7)～(9)は音楽リズムに、(9)～(13)は絵画製作におよそ該当するとした。

結果とその考察 遊びに関しては、よくする、ときどきするおよびしないのそれぞれについて、男・女・総計別に、地域別に、83項目のうち記入頻度のたかいものから列挙した結果を中心に以下報告する。すなわち、83項目を男女別および地域別に検討すると、全般的には、大体ある順位内にある特定の遊びが見出される

場合が多い。しかし、さらに次のような分類を試みた。すなわち男女地域を通して遊ぶ頻度の非常にたかいもの、若干の地域差のみられるもの、地域差の大きいもの、地域差の小さいものなどである。

よくする遊びについて 男女・各地域を通して頻度が多く%のたかいもの、すなわち、①～⑩(注・数字は83項目中の順位番号)を占める遊びについてみると、「テレビをみる」が全般的に順位①である。八四%(姫路・豊中・女)～九一%(大阪・男)となっており、家庭生活の中にテレビが浸透しているといえよう。このことはまた、施設など幼児教育の場においても、テレビの普及による影響に関して考慮を払うべきだといえよう。

各地共通に①～⑤に入る遊びは男子では「絵本をみる」および「砂あそび」で、女子では「絵本をみる」であった。男女・地域を問わず⑤までに入る遊びは、「テレビをみる」「絵本をみる」であるといえよう。遊びの機能からみれば、これらはいずれも受容的な遊びであり、テレビを見る時間、絵本の選択など留意すべき課題も多いと思う。男子の遊びで各地共通に①～⑩に入ったものは「怪獣遊び」「乗物の玩具遊び」で、女子は「絵をかく」「うたをうたう」「ままごと」であり、「絵をかく」「うたをうたう」以外に男女差が大きい。例えば「怪獣あそび」は男子では③～⑧であるのに、女子では⑦～⑩で、ままごと遊びは女子は③～⑥を占め、

第3表 よくする遊び (地域差の若干あるもの)

| あそびの種類 | 男 | | あそびの種類 | 女 | |
|-------------|--------------------------|------|-------------|--------------------------|-------------------------|
| | H 地域 | L 地域 | | H 地域 | L 地域 |
| 1 いろいろあつめる | ② 高知 | ⑪ 姫路 | 1 砂あそび | ② 姫路 | ⑪ 神戸 |
| 2 泥いじりをする | ④ 姫路 | ⑬ 高知 | 2 いろいろあつめる | ⑦ 高知 神 豊 中 戸 | ⑫ 富山 |
| 3 数をかぞえる | ⑥ 高知 | ⑫ 大阪 | 3 数をかぞえる | ⑦ 大阪 | ⑭ 姫路 |
| 4 本をよんでもらう | ⑦ 高知 | ⑬ 大阪 | 4 おりがみをする | ⑦ 富山 | ⑱ 高知 |
| 5 飛行機をとばす | ⑧ 高知 | ⑯ 大阪 | 5 ぬりえ | ⑧ 高知 | ⑭ 大阪 中 豊 |
| 6 積木あそび | ⑧ 大阪 | ⑰ 豊中 | 6 ぶらんこにのる | ⑧ 高山 姫 路 | ⑰ 神戸 |
| 7 うたをうたう | ⑩ 豊中 | ⑯ 高知 | 7 字をかく | ⑨ 神戸 | ⑱ 豊中 |
| 8 水あそびをする | ⑩ 大阪 | ⑯ 姫路 | 8 おりがみをする | ⑩ 大阪 | ⑲ 豊中 神 戸 |
| 9 おりがみをする | ⑬ 姫路 | ⑳ 高知 | 9 本をよんでもらう | ⑪ 高知 | ⑲ 神 戸 大 阪 |
| 10 三輪車にのる | ⑭ 富山 大 阪 姫 路 | ⑳ 高知 | 10 買物についていく | ⑫ 高知 | ⑳ 姫 路 中 大 阪 |
| 11 きりがみをする | ⑰ 大 阪 姫 路 | ㉓ 豊中 | 11 かけっこをする | ⑬ 神戸 | ㉓ 大 阪 中 豊 |
| 12 数字をかく | ㉓ 姫路 | ㉔ 大阪 | 12 買物ごっこ | ⑬ 高知 | ㉔ 大阪 |
| 13 ちゃんばらをする | ㉕ 富山 | ㉕ 高知 | 13 泥いじり | ⑮ 富山 大 阪 姫 路 | ㉓ 神戸 |
| 14 ぬりえをする | ㉖ 姫路 神 戸 | ㉙ 高知 | 14 すべり台であそぶ | ⑮ 豊中 | ㉕ 姫路 |
| 15 ゲームあそび | ㉘ 神 戸 高 知 | ㉙ 大阪 | 15 数字をかく | ⑮ 神戸 | ㉖ 豊中 |
| 16 かくれんぼをする | ⑳ 神 戸 | ⑳ 豊中 | 16 水あそびをする | ⑱ 大阪 | ㉗ 豊中 |
| 17 花火あそび | ㉙ 高知 | ⑫ 富山 | 17 らくがきをする | ⑳ 大阪 | ㉙ 姫 路 中 豊 |
| 18 鉄棒であそぶ | ㉙ 姫路 | ④ 高知 | 18 しゃぼん玉 | ㉒ 富山 | ⑩ 神 戸 大 阪 |
| 19 探偵ごっこ | ④ 大阪 | ④ 高知 | 19 鉄棒であそぶ | ㉓ 富山 | ⑩ 神 戸 高 知 |
| 20 野 球 | ④ 高知 | ④ 豊中 | 20 レコードをきく | ㉕ 豊中 | ⑩ 神 戸 高 知 |

それが男子では⑤⑧となつてゐる。

次に若干の地域差のみられる遊びについて述べるが、地域によって多少の変化がみられるものばかりあげたが、この分類に入るものは女子の遊びにより多い。

すなわち、女子の遊びの方が、男子より地域差が少ないとも考えられるのではなからうか。頻度のたかいものから、男女20種まであげたものが第3表である。

地域によって差の大きい遊びのみをあげ(順位で16以上差異のあるもの)、これを地域差の大きいものから男女とも10位まで、列挙したものが第4表である。それぞれ原因を検討すべきであるが、ここでは省略する。全般に地域差の大きいものは、例えば動物園など施設の有無に係するもの地域環境・遊び場の状況・地方色などと関係ある項目が多いが、男女によつて内容は異なつており、はっきりしたことはいえない。

地域差の少ないもの、すなわちほとんど

第4表 よくする遊び（地域差の大きいもの）

| | あそびの種類 | 大 阪 | 神 戸 | 豊 中 | 姫 路 | 高 知 | 富 山 |
|---|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 順位 % | 順位 % | 順位 % | 順位 % | 順位 % | 順位 % |
| 男 | 1 じんとり | 83 1 | 45 4 | 83 1 | 83 1 | 77 3 | 83 1 |
| | 2 動物園に行く | 44 13 | 38 22 | 44 16 | 70 4 | 52 11 | 63 6 |
| | 3 すべり台であそぶ | 43 19 | 14 43 | 14 42 | 24 33 | 21 35 | 21 34 |
| | 4 カルタであそぶ | 17 36 | 42 17 | 42 2 | 46 15 | 35 19 | 38 18 |
| | 5 めんこ | 81 1 | 53 13 | 79 1 | 79 2 | 66 6 | 80 2 |
| | 6 草花つみ | 56 9 | 47 14 | 63 8 | 37 22 | 63 4 | 46 14 |
| | 7 マリであそぶ | 24 28 | 31 26 | 55 23 | 29 37 | 49 13 | 33 20 |
| | 8 廃品で作品をつくる | 44 18 | 38 19 | 54 12 | 29 26 | 41 14 | 45 15 |
| | 9 なわとびをする | 65 4 | 69 5 | 57 8 | 51 8 | 76 2 | 67 5 |
| | 10 虫とり | 38 18 | 37 22 | 15 41 | 15 36 | 32 29 | 19 3 |
| 女 | 1 草花つみ | 44 16 | 41 19 | 17 47 | 24 32 | 34 25 | 26 31 |
| | 2 海水浴 | 36 21 | 49 16 | 28 30 | 51 9 | 35 25 | 54 8 |
| | 3 ゴムひもとび | 54 9 | 61 8 | 69 1 | 45 11 | 53 10 | 50 8 |
| | 4 あやとり | 59 6 | 48 17 | 72 1 | 61 5 | 60 7 | 56 7 |
| | 5 カルタであそぶ | 34 22 | 42 20 | 46 16 | 39 2 | 23 34 | 38 19 |
| | 6 人形あそび | 6 64 | 2 81 | 2 80 | 3 76 | 2 75 | 24 55 |
| | 7 動物園に行く | 47 14 | 71 3 | 51 14 | 69 2 | 50 11 | 70 3 |
| | 8 どろぼうごっこ | 75 2 | 77 1 | 59 5 | 67 3 | 80 1 | 74 2 |
| | 9 果物とり | 79 1 | 68 7 | 58 1 | 78 1 | 58 7 | 78 1 |
| | 10 マリであそぶ | 21 41 | 21 40 | 33 27 | 23 32 | 39 19 | 30 28 |

第5表 よくする遊び（地域差の小さいもの）

| | あそびの種類 | 大 阪 | 神 戸 | 豊 中 | 姫 路 | 高 知 | 富 山 |
|---|-------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 順位 % | 順位 % | 順位 % | 順位 % | 順位 % | 順位 % |
| 男 | 1 買物ごっこ | 50 12 | 50 13 | 48 13 | 48 10 | 48 13 | 48 11 |
| | 2 ぶらんこにのる | 22 34 | 21 35 | 24 33 | 22 35 | 22 34 | 22 34 |
| | 3 たけうま・かんうま | 82 1 | 83 1 | 80 1 | 82 1 | 79 1 | 79 2 |
| | 4 動物とあそぶ | 45 13 | 44 16 | 45 15 | 44 15 | 41 20 | 47 13 |
| | 5 しゃぼん玉 | 30 23 | 32 26 | 36 23 | 36 18 | 31 27 | 31 21 |
| | 6 わなげ | 78 2 | 77 3 | 76 1 | 75 2 | 72 3 | 73 3 |
| | 7 どろぼうごっこ | 78 2 | 77 2 | 76 1 | 75 2 | 72 1 | 78 2 |
| 女 | 1 積木あそび | 23 31 | 31 30 | 31 29 | 26 32 | 27 31 | 27 31 |
| | 2 飛行機をとばす | 65 5 | 67 3 | 62 3 | 64 3 | 65 5 | 62 5 |
| | 3 三輪車にのる | 32 27 | 29 37 | 34 25 | 35 25 | 33 27 | 32 27 |
| | 4 ゲーム | 46 14 | 46 17 | 49 14 | 49 10 | 43 18 | 48 10 |
| | 5 テレビ体操 | 55 7 | 57 9 | 57 7 | 57 5 | 61 6 | 59 2 |
| | 6 楽器をひく | 26 33 | 28 33 | 21 42 | 27 31 | 26 32 | 28 29 |
| | 7 チャンバラをする | 72 2 | 75 1 | 68 1 | 74 1 | 70 2 | 72 2 |

と同じ順位のところに同じ遊びが共通にあるものが、男女によって内容の項目は異なるが若干あり、その差の少ないものから示したものが第5表である。地域環境が異なっているにもかかわらず、順位の等しい遊びがあることは興味深い。

ほとんどしない遊びとしては、㊸㊹㊺に入る男子の「たけうま、かんうま」などがこれに該当するといえよう。

ときどきする遊びについて ときどきする遊びとして各地域共通に①④⑤に入っているものは、男子では「しゃぼん玉」で、女子では、「しゃぼん玉」および「花火遊び」である。全般にときどきする遊びはよくする遊びに比して、季節的なものや、行動範囲がより大きいというか運動量の大きいものが多い。

しない遊びについて ほとんど遊ばないものとして各地域共通に①④⑤に入る遊びは、男子では「たけうま・かんうま」で、女子では「西部劇ごっこ」「たけうま・かんうま」である。しない遊びの低位をみると、男女通して「絵本をみる」が最も多く、よくする遊びの上位とは、やや一致しない。

四、遊具について

調査方法 遊具の調査は他の項目と同様に質問紙法で、「家にある遊び道具（家にあるものはすべて番号に○をつけて下さい）」ということで、「1、三輪車」から「83、ピーズ」までの83項目を

列記した。これらの項目は、幼稚園教育要領の六領域も考慮して抽出した。

結果とその考察 遊具の調査結果は、(1)男子、(2)女子、(3)男女総計の三種に区分して、それぞれを地域別に整理した。紙数の関係で全体を記述できないので、そのうち男女総計を基準として、問題のうちの幾つかについて述べることにした。先ず、家庭にある遊具のうちで、男女総計で各地域共通に上位にあるもの（所有の順位と%の多いもの）を示したものが第6表である。

これらの上位にある遊具に共通していると考えられるのは次の通りである。第一に、「うきぶくろ」と「なわとびのなわ」以外は室内のものである。すなわち大部分は室内遊具といえる。特に、十位以内で共通しているものは、全部室内遊具である。第二に、保護者の費用の負担の重くないもの、(テレビを除く)第三に、保護者がみて、教育的効果があると考えられるもの、第四に、保護者の幼児時代にすでにあったもの(テレビを除く)などである。このようにみると、家庭によくある遊具は格別に時代的な変化がないともいえるのである。なお、この場合、テレビとトランプは純粹に幼児の遊具として具えられたものかどうか問題である。

また、逆に家庭にある遊具で下位のもので（所有する家庭の少ないもの）、各地域に共通するものを挙げたのが第7表である。

下位にある遊具は、上位にある遊具にみられるような全般的な

第6表 所有度の多い遊具

| 遊 具 | 男 | 女 | 総 計 |
|--------------------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| ・上位10以内で共通するもの（○の中は上位よりのそれぞれの地域での順位） | | | |
| 1 クレヨン・クレパス | 大阪① 94.5% 姫路① 95.1% | 神戸① 98.4% 高知① 95.8% | 豊中① 99.5% 富山① 96.8% |
| 2 のりもの絵本 | 大阪④ 92.1% 姫路⑤ 88.9% | 神戸⑤ 93.0% 高知⑥ 89.2% | 豊中③ 98.5% 富山⑥ 92.0% |
| 3 動物絵本 | 大阪⑤ 92.0% 姫路③ 90.0% | 神戸⑥ 92.6% 高知④ 89.8% | 豊中④ 97.5% 富山⑤ 92.5% |
| 4 色がみ | 大阪⑦ 90.9% 姫路② 92.2% | 神戸② 97.4% 高知③ 90.4% | 豊中② 99.0% 富山② 95.2% |
| ・上記4項目以外で20位以内で共通のもの | | | |
| 5 テレ ビ | 大阪① 94.5% 姫路⑨ 82.8% | 神戸④ 93.6% 高知② 92.5% | 豊中⑱ 84.0% 富山③ 93.5% |
| 6 うきぶくろ | 大阪⑥ 91.1% 姫路⑥ 87.7% | 神戸⑨ 90.0% 高知⑩ 86.5% | 豊中⑥ 94.5% 富山⑫ 83.9% |
| 7 物語絵本 | 大阪⑧ 88.2% 姫路⑧ 84.2% | 神戸⑧ 90.8% 高知⑤ 89.8% | 豊中⑪ 87.5% 富山⑨ 87.2% |
| 8 子ども用はさみ | 大阪⑨ 87.3% 姫路⑦ 87.3% | 神戸⑦ 92.0% 高知⑦ 88.6% | 豊中⑭ 85.5% 富山⑧ 89.8% |
| 9 積 木 | 大阪⑩ 86.7% 姫路⑪ 80.7% | 神戸⑩ 89.4% 高知⑨ 89.2% | 豊中⑤ 95.5% 富山⑪ 88.0% |
| 10 ぬ り え | 大阪⑪ 83.3% 姫路⑩ 81.8% | 神戸⑪ 88.4% 高知⑫ 82.3% | 豊中⑮ 85.5% 富山⑩ 88.9% |
| 11 ト ラ ン プ | 大阪⑮ 78.9% 姫路⑭ 73.0% | 神戸⑭ 83.4% 高知⑮ 80.8% | 豊中⑯ 85.0% 富山⑬ 83.3% |
| 12 なわとびのなわ | 大阪⑯ 78.2% 姫路⑮ 77.7% | 神戸⑬ 84.2% 高知⑯ 79.0% | 豊中⑳ 83.0% 富山⑰ 77.0% |

共通性がないのである。むしろ、それぞれの遊具の本質的な条件や社会的条件によって、下位になったものと考えられる。それだけのちがった条件を列挙すると次の通りである。第一に、子どもの発達段階から考えて、高級で不適當と思われるもの、第二に、室外や室内で適當な広さの場所を必要とするもので、その場所の

最低、最高を示すものの一番多いのは団地居住の豊中・池田地区である。ここに団地の居住性からくるものと文化性からくるものとをみるることができる。すなわち「自転車」や「虫とり網」などの居住地域条件に関連のあるものは大都市に少なく、それ以外の中小都市に多い。また、子どものレコード・パズル・カスターネッ

確保が問題となるもの、第三に、家になくても、近くの公共施設などで利用できるもの、第四に、保護者にあまり教育的でないと考えられるもの、第五に、相当に費用のかかるもの、第六に、保護者になじみのない新しいもの、第七に、男女総計であるので男子か女子のどちらかがあまり使用しないものなどである。

さらに、遊具で各地域によって、順位に差のあるもの、つまり地域によって普及のちがいのある遊具について述べる

と、第8表のようにするのである。

この順位差の大きい遊具をみてみると、子どもの生活環境のちがいと遊具の普及の変動の動向を指示しているようにも思えるのである。この順位差のなかで

第7表 所有度の少ない遊具（男女総計）

| 下位10位以内共通のもの（83項目のうち74位から83位） | | | | | | |
|-------------------------------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 | 子ども用大工道具 | 大阪⑧ 8.0% | 神戸⑫ 12.5% | 豊中⑩ 11.0% | 富山⑧ 6.4% | 姫路⑧ 6.8% |
| 2 | ピンポン用具 | 大阪⑫ 12.5% | 神戸⑪ 13.7% | 豊中⑫ 11.5% | 富山⑦ 23.5% | 姫路⑫ 10.0% |
| 3 | すべり台 | 大阪⑪ 15.2% | 神戸⑧ 10.3% | 豊中⑦ 26.0% | 富山⑫ 11.8% | 姫路⑪ 11.5% |
| 4 | 標本 | 大阪⑦ 22.1% | 神戸⑩ 21.3% | 豊中⑧ 25.5% | 富山⑩ 16.1% | 姫路⑩ 13.3% |
| 5 | お手玉 | 大阪⑦ 26.0% | 神戸⑧ 29.0% | 豊中⑨ 23.5% | 富山⑨ 20.2% | 姫路⑦ 22.2% |
| 下位10位以外で下位20以内共通のもの（64位～83位） | | | | | | |
| 6 | めんこ | 大阪⑩ 17.7% | 神戸⑥ 43.0% | 豊中⑩ 13.0% | 富山⑦ 23.6% | 姫路⑥ 29.2% |
| 7 | のれる自動車 | 大阪⑨ 21.4% | 神戸⑥ 38.6% | 豊中⑦ 31.5% | 富山⑧ 20.3% | 姫路⑦ 18.2% |
| 8 | ブランコ | 大阪⑦ 25.6% | 神戸⑨ 22.1% | 豊中⑦ 35.0% | 富山⑦ 23.9% | 姫路⑦ 30.4% |
| 9 | おもちゃの虫類 | 大阪⑧ 21.7% | 神戸⑦ 35.0% | 豊中⑩ 14.0% | 富山⑩ 17.5% | 姫路⑦ 24.9% |
| 10 | てっぽう | 大阪⑦ 30.1% | 神戸⑦ 33.4% | 豊中⑦ 31.5% | 富山⑦ 25.2% | 姫路⑦ 17.3% |
| 11 | タンバリン | 大阪⑦ 34.3% | 神戸⑦ 31.2% | 豊中⑥ 42.5% | 富山⑦ 29.3% | 姫路⑦ 17.9% |

トおよび怪獣おもちゃなどの新しい幼児の遊具は都市地域とその周辺に多いようである。なお、姫路にシャベルの少ないのは、それに関連のある行動が少ないのではなしに、直接的にそれに代わる行動と道具が十分あるためにこの結果となったと思われる。これらの状況は第9表の如く男子と女子の順位差のある遊具をみる

具の地域
この遊
なる。
明らかに
とさらに

第8表 地域による順位差の大きい遊具（男女総計）

| 遊具(差) | 大阪 | 神戸 | 豊中池田 | 姫路 | 高知 | 富山 |
|--------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 自転車(40) | ④ 54.0% | ⑤ 47.4% | ⑤ 56.5% | ⑦ 77.8% | ⑧ 61.4% | ⑥ 53.8% |
| 子ども用レコード(39) | ⑤ 71.6% | ⑨ 71.1% | ⑧ 89.0% | ④ 47.4% | ⑫ 65.3% | ⑦ 62.1% |
| シャベル(34) | ⑭ 78.9% | ⑯ 82.0% | ⑦ 92.5% | ⑪ 50.9% | ⑧ 88.0% | ⑦ 90.4% |
| 小さいボール(28) | ③ 93.8% | ③ 95.6% | ⑩ 78.0% | ④ 89.1% | ⑪ 85.0% | ④ 92.6% |
| バズル(27) | ⑥ 40.6% | ⑥ 47.0% | ⑤ 62.5% | ⑦ 24.6% | ⑥ 43.3% | ⑥ 42.0% |
| 虫とり網(25) | ⑧ 62.4% | ⑫ 69.9% | ⑬ 85.5% | ⑬ 78.9% | ⑫ 75.1% | ⑬ 78.7% |
| 大きいボール(24) | ④ 71.9% | ⑧ 71.1% | ③ 75.5% | ④ 51.1% | ⑤ 55.1% | ④ 52.3% |
| カルタ(22) | ⑫ 72.7% | ⑫ 76.2% | ⑤ 72.2% | ⑫ 71.6% | ⑬ 81.7% | ⑬ 77.5% |
| カスターネット(22) | ⑩ 61.6% | ⑬ 59.5% | ⑥ 71.5% | ⑫ 62.5% | ⑦ 61.4% | ⑤ 50.7% |
| ふうい(22) | ⑩ 52.2% | ⑫ 44.2% | ④ 62.5% | ⑫ 43.0% | ⑥ 34.3% | ⑤ 45.2% |
| じょうご(21) | ④ 51.8% | ④ 53.7% | ⑤ 59.0% | ④ 48.5% | ⑤ 49.4% | ⑥ 70.3% |
| 怪獣おもちゃ(21) | ④ 54.0% | ③ 62.3% | ⑤ 56.5% | ④ 45.2% | ⑤ 47.3% | ⑥ 43.2% |
| 輪なげ(21) | ④ 40.5% | ⑦ 37.6% | ⑥ 44.5% | ④ 27.5% | ⑤ 46.7% | ④ 52.0% |

(このほか、20位の順位のあるものは、「おもちゃの動物」「虫かご」「おもちゃの黒板」「子ども用ビニールプール」「おはじき」などである。)

第9表 地域による順位差の大きい遊具（男子および女子）

| 遊 具 (差) | | 大 阪 | 神 戸 | 豊中池田 | 姫 路 | 高 知 | 富 山 |
|---------|---------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 男 | シャベル (55) | ⑭ 78.8% | ⑮ 81.0% | ⑭ 91.7% | ③ 30.1% | ⑫ 85.5% | ⑧ 81.9% |
| | 小さいボール (42) | ① 97.1% | ① 99.2% | ④ 65.7% | ② 93.7% | ⑥ 91.3% | ⑤ 93.3% |
| | おもちゃの動物 (37) | ⑦ 77.0% | ⑦ 75.2% | ⑩ 87.3% | ⑤ 44.0% | ② 77.3% | ② 69.5% |
| | 自転車 (37) | ④ 58.7% | ④ 56.3% | ④ 61.8% | ⑫ 83.1% | ⑩ 73.3% | ⑦ 62.0% |
| | めんこ (34) | ⑨ 18.7% | ⑥ 57.8% | ⑧ 18.6% | ⑦ 39.9% | ⑤ 41.3% | ⑥ 28.3% |
| | 子ども用レコード(32) | ② 71.5% | ③ 69.8% | ⑤ 88.2% | ④ 46.3% | ⑤ 68.0% | ④ 58.7% |
| | 子ども用 ビニールプール(27) | ⑦ 62.2% | ⑦ 45.8% | ③ 68.6% | ④ 29.5% | ⑤ 43.6% | ⑥ 40.0% |
| | 大きいボール (25) | ② 72.1% | ⑦ 66.9% | ③ 76.5% | ④ 47.6% | ④ 51.7% | ⑤ 48.4% |
| 女 | 自転車 (41) | ⑤ 49.6% | ⑦ 36.5% | ⑤ 51.0% | ② 71.8% | ⑤ 48.8% | ⑤ 45.8% |
| | テレビ (38) | ① 93.5% | ⑥ 93.3% | ③ 70.4% | ② 71.4% | ⑩ 88.3% | ⑦ 93.1% |
| | なわとびのなわ (31) | ④ 83.9% | ⑦ 92.9% | ③ 71.4% | ⑪ 85.2% | ② 78.4% | ④ 88.6% |
| | 子ども用ハサミ (30) | ⑧ 87.7% | ⑪ 89.9% | ⑦ 72.4% | ⑦ 88.0% | ④ 84.6% | ⑧ 93.1% |
| | 子ども用レコード(29) | ② 71.7% | ③ 72.6% | ⑤ 89.8% | ④ 48.6% | ⑩ 62.3% | ⑦ 65.4% |
| | おはじき (26) | ⑤ 48.8% | ⑦ 64.7% | ⑤ 58.2% | ④ 47.0% | ② 71.5% | ③ 65.4% |
| | ビーズ (26) | ⑤ 40.1% | ④ 31.7% | ⑤ 19.4% | ⑤ 41.9% | ③ 63.6% | ⑤ 44.6% |

第10表 絵本の種類（男女総計）

| 絵本の種類 | 大 阪 | 神 戸 | 豊 中 | 姫 路 | 高 知 | 富 山 |
|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| のりもの絵本 | ④ 92.1% | ⑤ 93.0% | ③ 98.5% | ⑤ 88.9% | ⑥ 89.2% | ⑥ 92.0% |
| 動物絵本 | ⑤ 92.0% | ⑥ 92.6% | ④ 97.5% | ③ 90.0% | ④ 89.8% | ⑤ 92.5% |
| 物語絵本 | ⑧ 88.2% | ⑧ 90.8% | ⑪ 87.5% | ⑧ 84.2% | ④ 89.8% | ⑨ 87.2% |
| 童謡絵本 | ⑦ 76.5% | ⑩ 79.0% | ⑨ 88.0% | ② 70.7% | ⑩ 78.7% | ⑦ 79.0% |
| 花草絵本 | ② 72.0% | ⑩ 70.5% | ② 83.0% | ⑩ 76.0% | ② 72.2% | ② 73.6% |

間の順位差を、遊具の変動の動向と解釈すれば、順位差の大小があるのであるから、当分変わらない遊具と、変わりつつある遊具があるといえよう。問題は遊具が変わっていつて、新しい社会や生活様式のもの遊具が、子どもにどんな行動をとらせ、どんな能力をつけるかということである。このようなことを考えてみると次のような傾向がみられるように思われる。第一に、順位差の小さい遊具や新しく家庭に普及しつつある遊具は、室内用ないしはこれに準ずるもので、概して小さいものが多い。第二に、逆に減少していくと考えられる遊具は戸外用のものが多い、第三に、幼児が直接的に行動する遊具より、鑑賞的な遊具が多くなる。例えば、姫路地区を除いては「虫とり網」よりは「虫かご」が多くなっている。第四に、幼児の直接的な生活に関連のある遊具よりは、間接的な生活に関連のあるものの遊具が増えている。例えば「怪獣おもちゃ」とか、第10表のごとく、動物園の動物の絵本が多くて、身近な植物や動物に関する絵本が姫路を除いては少ないのである。このように、家庭生活における幼児の遊びの条件に変化がおこっていることを考えるとき、その変化の内容の詳細な検討とともに、これに対応する組織的な幼児教育のプログラム作製の必要性を感じるのである。

愛珠

思い出するままに(六)

中村道子



(一) 御堂筋における幼児の交通

一か年の愛珠勤務経験は、私に不安感を、もう持たせなくなっていた。

通園道路の中で一番癩だといわれる所は、今橋通りの御堂筋を越す箇所であった。何分道路の幅が広いので、職員一同は注意に注意を重ね、私が赤旗を持ち、先生二人を交代で当番制にして、毎日三人で渡らせることにしていた。最初小使さんが旗を持つことを不安がって、躊躇していたから、私が西六幼稚園で白髪橋の電車を渡らせる時、赤旗を持って指揮していたから、大体要領はわかっていたが、白髪橋筋の三倍以上も道幅が広いので、非常に緊張してことに当たった。

先ず愛珠園から今橋通りを西へ進み、日本生命保険会社の西南角の人道で、二列を四列縦隊にして隊列を狭め、自転車のみ

時を見計らって、地下鉄入口前の下まで行き、北方の淀屋橋の信号で車が止まる時、南方の平野町信号でも止まって、路面に車数が少なくなり、速度が多少緩やかになって間隔が少してきた瞬間、私が道の中央に走って行って赤旗を出すと、南北共に車が止まるので、幼児に進めと号令をかけると、一斉に四列で西の人道まで走って行き、南北の運転手に私が会釈をして幼児の後を追った頃には、二人の先生から「遊ばずに人道を通って早く家へ帰るのですよ」といわれ、互いに「さよなら」をいって別れていた。

園内での非常待避訓練には、地下室に降りる階段があるが、こは路面であるから動作は楽に早くできた。小使さんもだんだんなれて毎朝赤旗を持って、御堂筋の今橋西角に立ち、まばらに來る幼児を二、三人位まとめて東角まで、何回も連れて来てくれるようになったから安心であった。地下鉄には地下道もできていたが、電車が停車するたびに階段を昇降する人が多いから、かえっ

て管理に困るので路面を通ることとしていた。

幼児が幼稚園生活に大分なれた四月十八日に、また、全地区に警戒警報が発令されたので、いつものようにして避難の練習をしたが、間もなく解除されたので、緊張をほぐすためそのまま外遊びにして、自由に休息を取ることとした。

(二) 創設当初学区内の疑問を解除する

この園舎の建設当時に、参考室として資料が陳列されていた十八坪の室は、今は三十四畳敷の広間に変わり、四枚のまいら戸を左右に開けると、当時摂養室といていた十二畳の座敷と連なつて、大広間になり、四枚の障子を開けると、庭が全部目にはいって、美しかった。そしてその正面に、座敷と対峙して神殿がある。座敷から広い大きい沓脱に降り、飛石伝いに隣に出て、神殿に向かつて立つと、ちょうど視線が一直線になる。創設当時から今日まである神殿だから、六十一年の長い間幼稚園を、見て下さっていたことになる。この神殿を覆って雨露をしのいで共にあったこの覆いの杉皮葺の屋根も、今は疲れを見せ、皇霊殿も古びて来ているから、是も替えねばならぬと思つた。

愛珠の創設に当たつて、種々な経験を重ね、その記憶を辿つて綴られた瀧山さんの園史によると、愛珠が幼児の定員を六十四名としていたが、申込数が意外に少ないので不審に思い、区内の彼

方此方の人に聞きただすと、唱歌を讚美歌と誤解して、愛珠をキリスト教と関係あるものと思ひ違つて敬遠していたことがわかり、驚いて監事をはじめ関係者が、方々で説得すると共に入園の勧誘につとめ、一方神宮司庁にて、皇霊代を拝受して庭園の中央の位置に、社殿を設けたから、西教と関係のないことが一般に知られたので、人々も安心して、入園の希望数が増加して定員に達したそうである。そのため予定通り開園することができ、記念すべき六月一日午前九時の開園式に先立って、午前一時に清祝式を挙げ豊田・瀧山両監事をはじめ、保姆やその他有志が参列し、権少講義山本彦兵衛氏が、この祭事を掌られたそうである。幼稚園に神殿のあるのは珍しいことで、創設当時の学区内の世情が、右のような実状だったことに、よつたものである。

開園式には、大阪最初の公立幼稚園のことゆえ、当時の建野知事をはじめ、学務属、東区長、町会議員および幼児の父兄多数が、来賓として参列せられ、盛会だったと記録せられている。

(三) 愛珠創設に東京女子師範学校幼稚園監事の指導と助力

幼稚園開設に当たつて、質問事項を府学務課に問合せて、幼児教育関係のことを知る人がないのか、返答にはいつも要領が得られないので、その後、全部東京女子師範学校附属幼稚園監事

の、小西信八先生にお願いしたら、どんなことでも、懇篤に指導をして戴いたそうである。それ故、六月一日の開園式当日には、小西先生から「サキガケテ、オドロカシケリ、ナニハウメ、アツマノキギハ、ハルシラヌカト」との祝電をちょうだいしたと、瀧山さんは喜んで申されている。そして創設に先立って、区内の良家の子女、山片曾子さんと巽勢以さんの二人を選び、町会からの給費で、明治十一年にできた大阪府立模範幼稚園の、速成伝習生として、日々通学させ、開園前に卒業して帰っていたから、設立の時には実務者として、その準備にはげんだ。しかし何分速成伝習だったから、主席保姆には、小西先生にお願いして、女子師範の卒業生である長竹国子先生に来て貰ったそうであるが、それ以後は、何時も主任保姆も、小西先生に推選していただいたようで、そのご親切に対しては、いつも感謝しておられる。稲葉むめ園長も、お茶の水高師の出身で、はじめ主任保姆として、明治四十四年三月に来園せられたが、四十五年三月に塩野園長の後任として、園長に就任せられ、爾来滿二十年の長い間、重責を全うせられたのである。

(四) 園舎の建築状況

「先生！ 愛珠が建った時には、皆が御殿幼稚園やというて見に行きましてとな、その橘さんも見に行きはったそうでっせ、

なんせ家主さんや、建築屋さん、皆見に行つて、えらいもんやと、感心しはったそうでっせ」と、先日西六のおばさんに逢った時聞いていたが、橘さんは借家をたくさん持っていて、私が最初に西六幼稚園へ転勤した時分、よく幼稚園からですといつて電話を借りに行つた家である。

何しろ全園舎は、樺材で建てられ、殊に柱は、全部節無しの一八寸角が使われている。長い廊下に、列んで立っている柱も美しく、遊戯室から遠く向こうの倉庫まで、四寸幅の板が、真直ぐ十二筋に張られているから、柱の縦と廊下の横の線が、調和して感じが良かった。ここの建築のために、横堀筋の材木屋に一時材木が無くなったそうである。この前鉄供出の時、係の人が「愛珠から出した鉄は質が良い」といっていたように、建設当時に使われた物は、石材にしても髓にしても、皆吟味せられ、瓦は特別に焼かせたから、こうした物を、総合して建てられた物だけに、御殿幼稚園といわれ、普請に経験ある人が、見学に来たことは当然で、不思議には思わなかった。

「この前、私が遊戯室を掃いていたから、年配の人が入つて来てしげしげと彼方此方を見てはるから、尋ねたら『私は大工でして、昔ここの普請の時、まだ十代の若僧で、親方について来て、仕事をしましたが、今日この前を通つて今頃どうなっているかと思うて、見とうなりましたんで、入らせて貰いました』というて、暫

く見てはりました」と、奥井のおばさんから聞いたので「おばさん良かったわな、私もそんな人に逢うて、種々当時のことを聞きなかつたわ」と、残念に思った。愛珠が経た六十余年は、永いようだが人の世の短さを今更のように、私は考えさせられた。

(五) 神殿の改築と遷座

洪庵塾の筋向かいに、芦田さんの家がある。明治維新の頃からいる指物師で、お祖父さんが作られたという、八角で漆塗の玩具を列べるケースを、幼稚園に寄附して貰っている。さすが名人だっただけに、狂いのない良い仕事がしてあるので、長く北浜に住んでおられることと思ひ、芦田さんに古いこの辺のことを尋ねたら、子どもの時分に、家人から聞かされたあれこれを、私にも聞かせて下さった。それによると、以前私が教生時代に愛珠へ来た時、池の前にあつた花壇は、元は二階建の広い家で、洪庵塾の学生が、寮のように寝泊りしていたそうであるが、家がこわされた跡に稲荷社があつたそうである。何かしら木がたくさん生えていて、夜は子ども心に恐くて、前を通る時には、知らず知らず走つて家へ帰りましたといつておられたことがあつた。また芦田さんも二人の子どもたちも皆愛珠の卒業で、子どもたちは今愛日小学校へ通学して、芦田さんは母の会におられたが、引続き後援会の幹事をして下さっている。

私は毎朝大神宮へ参拝をした。こうして毎日社殿を見るたびに、傷みが相当ひどいから、修理することに決心したのである。修理をするにすれば、この際、位置は山の上に移し、宮の正面から、全園が見下ろされるような、位置に変えたいと思つた。

三社作りにして、正面中央には幼稚園が、昔戴いた皇霊代を祭り、向かつて左側は御霊神社の御守護を、そして右側には芦田さんのいつておられた地主の神霊を、祭らせていただくことに定め、最近比叡山での修業を終えて、僧籍に入られた方に相談すると、「それなれば地鎮祭に、私が行つて上げよう」といつて下さつたから、次の日曜日に決めた。その日は私が日直をすることにして、校務員と二人で当直し、他の人々には何もいわなかつた。そして一方は、先生とその弟子男女合せて五人が来園して下さり、式を済ませた。それは築山を取巻いて、広く笹を四角に建て、細い繩を四方に張りめぐらし、それに沿つて何か唱えながら、なんどもなんども塩を少しずつ撒きながら回られた。

この翌日から、堺市外の黒山にいる、西六時代から世話になつてきた植木屋に来て貰ひ、社殿の横で立枯れていた太い幹を取り除き、社殿を園長室に移して、この土台になつてきた自然石の組み立てを解き、その中にあつた土を砕いて格好よく周囲の土にならしている間に、片方では石屋がきれいな白い御影石を切つて、新神殿が安置出来るように、美しく積み上げていた。またもう一

人の植木屋は、旧神殿の土台になっていた石の形を見ながら、下から新神殿まで、昇り易くするために、何度も一足一足歩いては、石を置く位置を定め、形に応じて固定させて行ったから、以前よりは庭が一層美しく明るくなり、そして神殿の前へも昇り易くなった。神殿の右側からも、直ぐ降りられるようにして、宮の台石から少し離れて、一位の木の根元まで、胡蝶花を五、六株植えて貰った。また、その反対側の斜面を利用して雲梯の下まで、一面に鬼芝を植え、歩行の邪魔にならぬ所に、平戸を三株植え足して山に締りをつけたら、柔らかい感じを持つことが出来た。

五月二十七日の海軍記念日に、端午節句遊びを楽しみ、その翌日神殿の周囲の庭が一応整理出来たので、六月一日に六十二回創立記念式を挙行し、式後引き続き、御霊神社から、神官の園社司に來園を願ひ、大神宮社殿改築御遷座の式を行なった。この日は園児及び愛日国民学校一年生をはじめ、後援会々員が多数参加されて盛大であった。御霊神社の園さんは、昔愛珠の卒園で縁も深く、また、会員ならびに保護者の総代として玉串捧呈を、江戸堀玉水金光教々会の若夫人に依頼したから、難なくことが運び、和気あいあいのうちに終了することが出来たのである。

(六) 戦時下の保育

その後、警戒警報が発令されたが、状況によっては保育を続行

していたり、また、非常の作半を打ち鳴らして幼児を召集し、御堂筋以西と以東との二班に分けて、保母が引率して帰宅させたこともあったが、いずれも解除され、大事に至らずして済み、安堵したこともある。

また、本園が木造建築である故、周囲の建築物を保護するという意味から、警防団や警察の一部の人も来たが、園の由来をいつて受けなかった。七月に入って警戒警報が発令され、非常勤務用通行証が交付されたり、関係視学が視察に来て督学指導をされたり、保母の錬成会が催されたり、皆戦時下に関係する行事であつて、職員一同はよく励んだ。そして二期の中頃からは、託児的の事務を負うこととなり、毎日始業を午前七時から、終業は午後五時までとし、この希望を取ると、希望者は意外に多く、五十七人にも達した。家庭の人手不足と、雑用の繁多を、現わすものと推測した。そして、今後は戦争に限らず、こうした託児的の事業も、増加することだろうと思つた。

愛珠は市役所に近いし、道も役所からは分り易いから、新聞記者がよく撮影に來たし、放送局へもよく行って、いろいろ録音を取つたりしたので忙しいこともあつたが、それは幼児や保母たちのよい勉強にもなつたと思つている。こんな中でも殊に可愛く思つたことは、十八年の正月を迎え、拝賀式をすませて間もなく、放送局から一月八日には、かるた取りの放送を頼むといつて來

たから、年長児十名を残して、暫く説明し、六日には幼稚園で練習をすることとした。その日は昔の摂養室で、十人の幼児と保護者も加わって練習したが、興がのつて来て、おとも子どもも一団になって、一生懸命団子のように遊んだことであつた。

そんな姿を見ているうちに、皆が可愛くて、これも戦争がなかつたら心から楽しめるのにと、心淋しく感じた。また、幼児の保護者中の出征将士に、幼児の特技を入れて慰問袋を送ったり、今日までに区内における出征者の英霊を二度も迎えたり、また建物疎開をするよう注意を受けたが、いつも承諾はしなかつた。影で私のことを「頑固ばば」といったり「ごついおばはんや」といわれたが、私は一向平気でした。——建築資材に目をつけている人もいと聞いたから——戦争は未だそこまで行詰つてはいないと、信じていた。こうした慌しい心持の中に、三月十八日を迎え、第六十三回の保育修了式を挙行し、七十六名に保育証書を渡すことができて、真に嬉しく思った。

(七) 園舎の防空施設

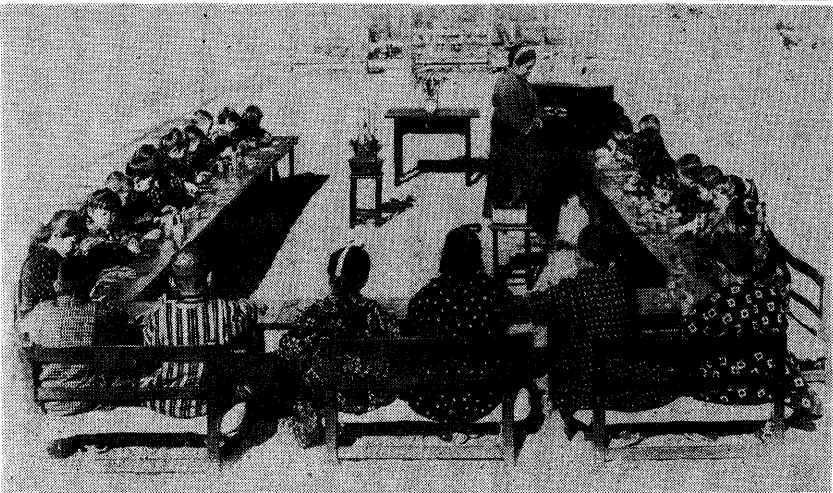
昨年十一月末に、愛珠が木造建築である故に、わざわざ市役所の建築部の責任者が来園せられ、詳細に調査して下さった結果、「木造は天井裏からの延焼が早く燃えやすいからこれを防ぐため、遊戯室から倉庫までの長い天井裏を、壁で三つに仕切ります

が、その仕切りの壁が廊下を通り抜けて、東西の庇まで出ますがそれは許して下さいね、廊下と庇に出る部分は、きれいに目立たぬようにしますけれど」といつて貰つたから、周囲の建物と調和が、あまりかけ離れないようにと頼み、また、二十六日には、防空資材商が建築局の人と共に来て、保育室及び隣接家屋の外側の壁面に、防火改修工事をするといつて下さつたから、是も受けた。

ちょうどその頃に、既に遊戯室の高い大屋根の頂上に、三尺平方の檣が出来ていて、それへ昇る梯子が取り着けられ、ものものしい感じを私らに与えていた。それは運動場から遊戯室の庇まで、二尺幅の取りはずしの出来る長い梯子が立てられ、庇には同じ幅の梯子が、大屋根の底下まで取り着けられ、それからまた大屋根まで梯子で昇り、その場から頂上にある火の見檣まで、長く続いている大屋根の取り着け梯子をまた昇り、四曲してやっと檣に着くから、下から見えていても恐かつた。大屋根の高さは、隣の日商株式会社社の三階中頃までで、この仕事が出来上がった時、「先生昇つてごらん」といわれたが、直ぐに足は出なかつた。「火事があれば昇つて行つて、ようすを見ねばなりませんな、そのうちに練習しますわ」といつて、誰もいない時、一人昇つて見たが、昇ることは出来ても、降りる時には足がふるえて一步も出がたいので、腰を下ろし屋根の方を向いて、足の方から静かに這うように祈念しながら下りたが、二度とは昇る気はしなかつた。

愛珠・写真集

- (上) ひなまつり (明治二十年前後)
- (中) ひなまつり (大正十二年頃)
- (下) 室外での設定保育 (明治四十年前後)





(上) 自由遊戯

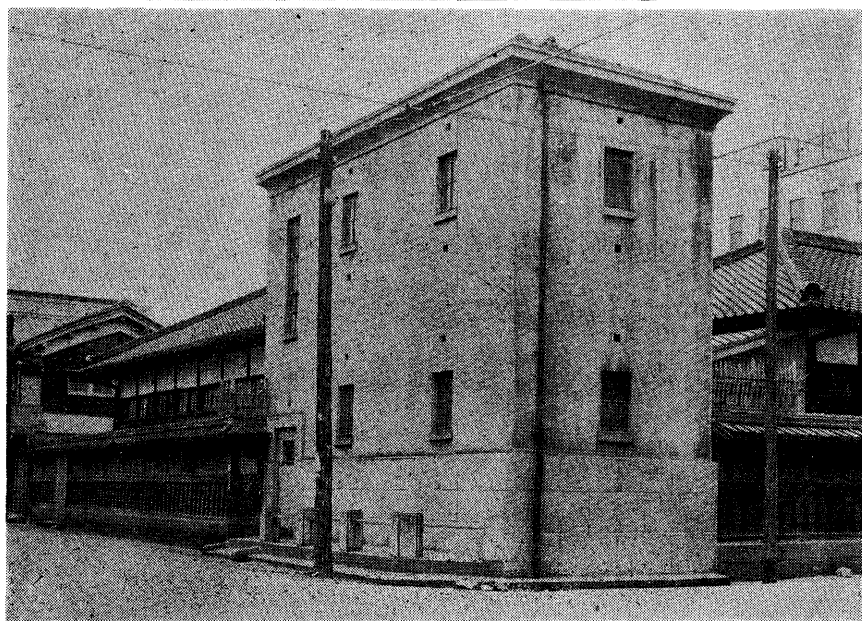
明治三十三年から四十年ごろのもの

(中) 作法(食事) 大正初期

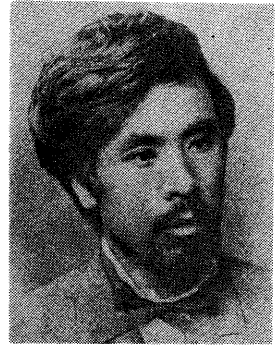


(下)

改築された倉庫
(現史料陳列室)

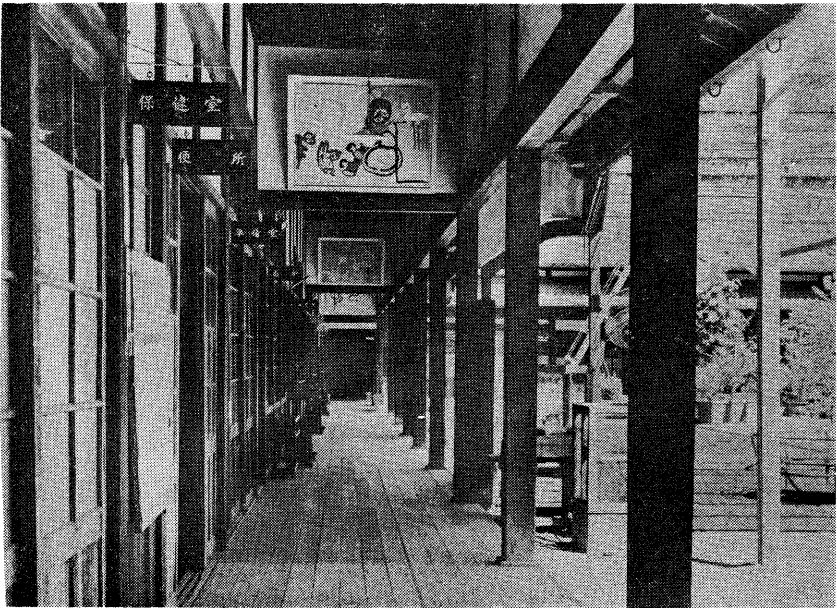


(上) 愛珠幼稚園規則
修正認可の督促



(中右) 東京女高師附属幼稚園監事
小西信八氏の肖像
(左) 小西氏より送られたもの
(氏)の御信条と思う)

(下) 防火施設の一部
天井裏より廊下と庇に作られた壁





幼 児 唱 歌 の 図



修身の図(二) 老人をいたわる

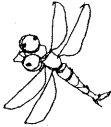


修身の図(一) 父母へのあいさつ

教師を束縛するもの

米国の幼児教育誌

—Childhood Education—



4月号は、「教師を束縛するもの」という特集のもとに、いくつかの論文が載せてある。その中の一つの、教師を縛っているものは何かという表題の論説を中心にして、現代の幼児教育にたずさわる保育者の当面

している問題にふれてみよう。

現代は他のいかなる時代よりも複雑であり、混乱した時代である。いろいろの違った種類の人々が、互に対等の立場で接触し、その間には利害が相反し、その生活の信条を異にし、感情を異にしている。人種の問題、職場の人間関係、労使の関係、学生運動、家庭における人間関係など、単純に解決しきれない多くの課題をふくんでいる。このような時代に、教育の果たさねばならぬつとめは実に大きいのである。どのようにしたら平和のうちに問題解決をすることができるか、個性を発揮しながらしかも集団生活の要求に従うことができるか、異なった考え方や思想を理解しながら共通の理解を求めていくことができるかなど、いずれも教育の負っている課題なのである。教師がこのような大きな課題ととり組むためには、全人格、全能力を傾けて、日

々の問題に当たることができるようになっていなければならない。

しかるに、この十数年来、教師に対して絶えざる批判の眼のみが向けられてきた。教師を励まし力づけるようなことばはほとんどきかれなかった。教育の指導層の人々はこの傾向を助長した。ある評論家がいつているが、最近の教育批評は、計画的に混乱を作り出しているようなものである。火のないところには煙は立たぬという諺があるが、むしろ、煙の立つところでは、だれかが火消しつばをひっくりかえしているのだ。いまや建設的な批判の精神は失われ、教師は教育指導者の批判によって恐怖にかりたてられ、防衛的になっていく。彼らは安全な領域に逃げこみ、子どもの教育は消極的になっている。

よみかき、算え方がこのごろの幼稚園では無視されている。音楽や造形などむしろなくてもよいのだが。

このごろの子どもの学力は低下している。もっと小さいときから知的訓練のドリルをする必要があるのだ。

赤ん坊のときから、字をよむ訓練をはじめることが出来る。それなのに、どうして幼稚園でもっと字を教えないのか、このような批判の声が次々に教師の耳に入ってくる。

こういう声に対して、教師ははっきりと答えるだけの確信を持っていない。その確信のなさが、教師を縛っているのだ。教師だけではない。全教育界が、こういう声におびやかされているのだ。そして、一世紀前に通りすぎたはずの教育思想に再びもどろうとしている。

ある教育評論家は次のようなことをいっている。校長や園長や管理者は、自分の園で本当の教育が行なわれているかどうかというよりも、世間の批判に対してより敏感になっている。世間の支持のない本当

の批判は、管理者にとってはほとんど問題にならない。世間の支持のある批判は、小さなことでも管理者にとっては大問題になる。

しかし、教育者は、本当の問題をとり違えてはならないのである。

われわれは、重要な問題を回避しないで、はっきりと見なければならぬ。

教育がその要求にこたえる必要のあるのは、まず第一に、成長しつつある子どもの要求にこたえることである。それは、からだと心と魂を養うのに必要なものは何であるかを考えていく努力である。世界中に空腹のものがなくなるような世界を作るために、他人とともに仕事をすることが出来る

ような人間、国際的な問題を平和的に解決する道を見出すことができるような人間、職場や身近な生活の中で、異なった考えを持つ人々と共に生活して共通の理解を求めていくことのできるような人間、このよう

な人間を作るのに必要な教育を考えていくことこそ、現代の教育の負っている課題なのである。

そして、幼児期は、このような課題にこたえることのできる時期である。幼稚園やナースリースクール、保育所の教育の内容を改善する必要が迫っている。このような教育の目標に向かって、教師と親は力を合わせていかねばならない。人間が自分自身の中に平和を保ち、お互いに平和を作り出していくためには、健康と、社会と、芸術にもっともっとカリキュラムの強調点がおかれなければならない。

教師は、現代の教育批判にとりこたえてはならない。子どもたちとともに、子どもたちの中ではたらきながら、そこで成長し発達していく子どもたちの姿をみて、そこで養われる満足と確信によって教育していかなければならないのである。(T)



いまは絵を見るだけでもいいのです。

美しく雄大なロマンや勇気ある物語が、
絵を見るだけでも、つよい感動の波とな
って、幼い心に広がっていきます——。

●世界名作シリーズ ●内容を的確に表

現した美しい絵と文章 ●豪華装本 ●

幼少年むき・園児にもおすすめください。

●有名デパート・書店またはフレーベル
館にてお求めください。

全国学校図書館協議会選定図書……日本図書館協会選定図書……中央児童福祉審議会推薦図書

トツパンの絵物語

ジャングル・ブック こじき王子
火の鳥 トム・ソーヤーの冒険 ふしぎの国のアリス こうのとり
になった王さま せむしの小馬 イワンのぼか ピノキオ クリスマス
・カロール ガリバー旅行記 ロビンソン・クルーソー

B 5判・380円

株式会社 フレーベル館

フリーベル館と旭化成が共同で研究したナック園児服

子どもを知っている
園児服です



このラベルが目じるしです

リトルカシミロン®
NUC ナック園児服 旭化成

どんな動きにも無理がないように、幼児の体型を調べ、科学的にデザインされたのがナック園児服です。フリーベル館と旭化成が共同で研究しました。素材はのびざかりせんいとして好評な、リトルカシミロン。デザインは8種類。長袖なので、秋、冬、春のスリーシーズン着られます。